
学園黙示録外伝 御劔紀行録

ウルフガイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園黙示録外伝 御劔紀行録

【Nコード】

N 6 4 2 9 M

【作者名】

ウルフガイ

【あらすじ】

御劔秋一は願っていた。退屈な日常の終わりを。しかし、それはあまりに突然にやってきてしまう。死の蔓延する地獄と変わったこの世界で、彼は生き延びることができるのか。

主人公とオリキャラ紹介。(前書き)

ネタバレは無いはずですが。

主人公とオリキャラ紹介。

オリキャラ説明。

名前：御劔 秋一 3年B組

年齢 - 18歳 / 身長 - 178cm / 体重 - 65kg /

特徴：目つきが悪い。髪の先端が白い。

説明：父が典型的なスパルタ馬鹿で、小学校3年くらいの頃に母死亡。それから父のスパルタが過激化した。

中学の頃から暇つぶし兼ストレス発散に不良狩りを始める。

この頃から高槻七星が付きまといってくるようになった。

不良狩りの最中に毒島冴子と邂逅、バトルになるがなんとか誤解を解いて引き上げる。

その後中学で出会ってしまい、七星が仲介をして和解。剣道でもやってみるか、となった。

そして高校、早々に行く大学が決まり（親のコネもあって）完全に不良として皆に扱われている。

<奴ら>の出現にも余り慌てずに冷静に対応している。

知り合いが困っていたら余り放っておけないタイプ。

というか他人がさつさと行動しないとイライラするタイプ。

今のところはまだ平静を保っているが、この先パニックにならないかはつきりしない。

名前：高槻 七星 3年A組

年齢 - 18歳 / 身長 - 162? / 体重 - 56? / スリーサイズ - 99 (I) - 60 - 92

特徴：アホの子。高校の中では一番の巨乳（鞠川校医除く）。

説明：ごく普通の家庭に生まれたごく普通の女子生徒。

頭の中がお花畑な女の子で、いつも秋一の後をトコトコとついてくる。

七星自身もかなりの変人なので友達は少ない。

秋一と遊ぶ？ようになってからは余計に他との付き合いが少なくなった。

毒島冴子とは同じクラスなので結構話をしたりする。

感性がおかしい部分で共通性があったりする。

<奴ら>の出現の際は、秋一が近くにいたためにあまりパニックにならなかった。

秋一に絶対の信頼を寄せているので、言う事を聞いていれば助かっている。

ぶつちやけ、主人公である秋一のお荷物キャラ。

秋一のそばにいる事が、彼女の心の平穏を保っている。
もしも少しでも離れ離れになった場合……どうなるか。

主人公とオリキャラ紹介。(後書き)

色々と隠れた表現があります。

第一話 さようなら日常、こんにちは非日常（前書き）

毎日見る風景が色あせて見えるようになったのはいつからだっただろうか。

いつもと変わらない朝。

いつもと変わらない昼。

いつもと変わらない夜。

ただそれを繰り返す退屈な日々。

そんな毎日が嫌で――

退屈じゃない日々が欲しくて――

俺は願っていた。

「こんな毎日が壊れてしまえばいいのに」と。

そして、その願いが叶う日は唐突にやってきた。

今までの毎日は失われ、俺が望んでいた世界がやってきたのだ。

……いや、俺は本当にそれを望んでいたのだろうか。

既に世界が壊れた今となってはしても意味のない問いだが、せずにはいられない。

俺が望んだことは、退屈なんかできない恐怖に満ちた毎日だったの

か。

それとも、平穩でもいいから幸せな毎日だったのか。

問わずにはいられないのだ。

御劔秋一の手記より。

第一話 さよなら日常、こんにちは非日常

ボタン！

どこか遠くの方でドアが閉まる音がしたような気がした。
いつもならそんな現実世界で聞こえてきた物音も夢のように感じて、
やり過ごしてしまう。

「……………」

だが、今日ばかりは別だったようだ。

「みっちゃああああああん！」

「………… あいつか」

授業を受けるのが馬鹿らしくなっていた俺は高校の屋上で寝転がっていた。

今は高校三年生で大切な時期だと言うが、既に行く道が決まっている俺には関係ない。

高校でやる内容も大体は習ってしまったし、授業を受けるのも億劫だ。

そんなわけで俺は不良なんかをやって授業をサボタージュしていた

のだが。

そんなところに叫び声が聞こえてきたのだ。
そしてそんな呼び方で俺を呼ぶ奴は一人しかない。

「やっぱりここにいた！」

「……なんだ七星。俺に何か用か」

「え？ えゝつとね。特に用はないんだけどね」

「じゃあ授業に戻れ。俺に関わってもロクなことはないぞ」

俺は屋上の入り口の上で寝っ転がりながら、こっちを見つめる女の顔を眺める。

この高槻七星という名の女子生徒とは結構長い付き合いだ。
中学一年のくせに『完全自殺マニュアル』なんて本を読んでいた俺に話しかけてきたのが始まりか。

変わった奴だと思っていたら、それから付きまとわれるハメになり、
こうやって屋上まで来るようになった。

いつも俺につき纏ってくる奴だが、彼女じゃあない。
ちなみにまだやってもない。言ったら案外OKしそうだが。

「さつき先生がみつちゃんのこと探してたよ？」

「またか。あいつらもいい加減諦めりやあいいのになア……」

「みつちゃんは偉いもんね。すごい大学に行くんでしょ？」

「どこ行っても変わりやあしない。どうせつまらんからな」

クソな親父のせいで寮に帰っても色々と連絡しなきゃならんからつまらんし。

大学に行けばこの土地から出れる事だけが救いだな。

親父は偉い大学に行けばそれでいいか思ってるようなクソ野郎だから幼いころから俺は苦労させられた。

色々な習い事もさせられて本当に大変だった。

ストッパーだった母が死んでからはそれが悪化した。

毎日が地獄のような日々で、過度のストレスで髪の毛の先が白くなるほどだった。

大学に入れば家を離れられる、それが救いのようなものだった。

「あたしもみっちゃんと同じ大学行きたいなあ……」

「お前の頭じゃひっくり返っても無理だ」

「ひどい！」

七星はアホだからからかうと面白い。

クラスの奴らとつるむよりはよっぽど楽しい。

ついでに胸もでかいから目の保養になる。

最近本を読んで知ってたのだが、胸のデカイ女が頭が弱いというのは本当だろうか。

こいつを見てみるとそれが正しいんじゃないかと思え始めてくる。そう言えば保険医の鞠川先生も頭が弱かったな。

……まさか本当に？

「みっちゃん、昨日の怪我は大丈夫なの？」

「ああ？ 俺が怪我するわけねえだろ？」

「だって怖い人たちがいっぱいいたし……」

「ああいうのを見かけ倒しって言うのさ」

「うう……せつかく心配してるのに……」

「色々と習わされたしな。ま、そんなもんなくても俺は強いんだが」

本当に強い奴らに比べればチンピラなんかの動きは止まって見える。夜の街で不良を潰してた頃に会った剣道部のアイツ、高名な剣道家の娘で確か名前は……毒島だったか。

俺は不良を潰してただけだというのに絡んできて、俺の木製バットとアイツの木刀での勝負になったんだよな。

最終的には誤解を解いておさらばして、次の日に学校で顔を合わせ、七星の仲介も会って俺が一時的に剣道部には行ったりなんなりとなつて……まあ今でも親交は続いている。

アイツも芯が通つたいい女だ。ああいうのが近くにいると助かるよな。

昨日、俺は昔やりあった不良グループとバトルしてたわけだが、あいつもいれば楽できたろうに。

そうでなくてもかすり傷を少しくらいしか負っただけだったが。

ちなみに七星はそういった事の役には立たない。

というかいても邪魔なだけだし。

「あれ？」

「どうした？」

「なんか校庭で……ひっ！」

「ったく。一体なに……が……」

そこに広がっていた光景に、俺は一瞬目を疑った。

俺達は二人とも視力がかなりいい方だ。

だから、校門の方で何が起きたのかがはっきりと理解できた。

——血まみれのヒトが、人間を食っている？

いや、それ以前に……

——アレはヒトなのか？

そして食われていた人間が起き上がり、フラフラと歩き始めた。

こちらに——校舎の方に向かって。

何人かは襲われて血まみれになりながらも、必死にこちらに向かって逃げてきている。

これは一体……

思考が疑問に支配されるが、近くにいたバカのおかげで俺は平静を取り戻した。

「みつちゃん！ みつちゃん！ アレ一体何なの！ ねえ！」

「落ち着けアホ七星！」

「あつっ！ うう……叩かなくてもいいのに……」

騒ぎたてる七星の頭を叩いた後でもう一度考える。
今度は頭が冷えた状態のままです。

死んだ人間がまた起き上がったということは感染する恐れがある。
ならばおそらく、俺が下に降りて警告する前に感染は拡大してしまうだろう。だいたいにして、俺なんて言う不良の警告をまともに聞いてくれるはずが無い。七星も俺とつるんでる上に馬鹿だから相手にされないだろう。

ならばともかく自分のために動くだけだ。
あとは知り合いくらいは助けてやるか。ついでに七星も。

「とりあえず武器がいるな……」

「へ？」

「やばそうだから行動を起こすぞ」

「で、でもここにいた方がいいんじゃない……」

「俺に任せとけ。いつもそうだっただろ？ 失敗はしないさ」

「……うん！ みっちゃんについてく！」

さて、行動開始だ。

俺は自分のバッグを持って屋上から下に降りる。

サボタージュしていた俺は、自分の荷物を全て（教科書除く）屋上へと持ってきていたのだ。

全く、何が幸いするかわからないものである。

俺達がさりげなく天文学部から武器として望遠鏡を頂戴して屋上を出て階段を下ろうとした時、校内のスピーカーからガガツと音が聞こえた。

『全校生徒・職員に通達します！！全校生徒・職員に通達します！！現在校内で暴力事件が発生中です、生徒は職員の誘導に従って直ちに避難してください！！繰り返します現在校内で暴力事件が発生中で・・・』

「今頃かよ。遅いつつの」

「みんな大丈夫かな……」

「さあね。パニックさえ起こさなきゃあ案外なんとかなんだろ」

ブツッ！！

キィィィ・・・ン

ガキン・・・！！

『ギヤアアアアッ！！あっ！！助けてくれっ止めてくれ！！たすけっ、ひいっ！！痛い痛い痛い！！助けてっ！！死ぬ！！ぐわあああ！！』

「……ま、パニックを起こすなっつー方が無理かもな」

「ええええ！？」

『人の死』が校内放送で流れればパニックも起こすだろうさ。

こんな状況でなければバトロワの模倣犯並に趣味が悪い悪戯だぜ。

それを証明するかのように下の方から叫び声やら何やら色々と聞こえてくる。

どうせパニックでも起こして学校から逃げ出そうとしているのだろう。

バカな奴らだ。

逃げ道など外には存在しないというのに。

ただ走って逃げるだけでは脱出することなどできないというのに。

「他の奴らは放っておけよ。武器を入手するぞ。確か、3年の教室のどっかに金属バットがある」

「ええ！？　なんでそんなものあるの！？」

「どっかの馬鹿がお礼参りに持ち込んだとか何とか……掃除用具入れの中だっけかな？」

「ふえゝ。運がいいねえ」

ちなみにその金属バットを持ってきたのは俺だ。

紫藤とかいうクソな教師がいるんだが、憂さ晴らしにそいつの車でもフルボッコしようと思ってたのだ。

後から親父の知り合いであるとも知ったので余計にぶっ潰したくもなかった。

……まあ、駐車場が目につき過ぎる場所だったので断念したが。

金属バット自体は野球部の奴が持ってきた事にして入れておいたのだ。

不良狩りをしてた頃のバカが高校に仕返しに来るとも限らんからな。

「とにかく急ぐぞ。三年の階は大丈夫だろうが、パニックが過ぎたらすぐに行くぞ」

「うん、わかった」

素直でよろしい。

俺は無事に金属バットを手に入れた。

ほぼ新品の品だ。これなら十分に武器になるだろう。

七星は後ろでじっとしていてもらおう。馬鹿だから逆に邪魔になるかもしれない。

「わかったか？」

「私も何かお手伝いしたい……」

「無理だ。諦める」

「ぶ」

とりあえずはこの学校にいても、それじゃいずれギリ貧になる。

どこか落ち着けるところに逃げ出さないといけない。

逃げ出せる手段としては……やはり車だろう。

運転だつて一応できない事もないからその方が楽だ。どっかで学校の先生を探すのも手だが。

……さて、とりあえずこの教室で使えそうなものをいただいとくか。下に行った奴はあらかた死んでるだろうからいらないだろうしな。

「七星、そつちのカバンを開けて使えそうなものがあるか探せ。俺はこつちから探す」

「人の荷物を勝手にあさつちゃだめだよ」

「もうあいつらはここに帰ってこないさ。いいからやれ！」

「はあい」

こいつ、こんな甘い考えで大丈夫なんだろうか。

見てると心配でハラハラしてならない。

やれやれだ。

「さて、ざっとこんなもんか」

「いっぱい見つけたよ！ みつちゃん褒めて！」

「おーおー。良くやったな〜」

「んふふ〜」

教卓の上にクラス中の荷物を集め終わった。

中身が大量に残ってる水筒などは実に役に立つからな。さすがに全部は無理だが貰っておこう。

ついでに弁当の中身も拝借。

おにぎりやサンドイッチはいいね。バッグの中に入れておこう。

スナック菓子も長持ちするから一応……チョコとかもあるな。ふまじめな奴らに感謝感謝…… っと。

「じゃあ七星。バッグは頼んだ」

「私が持つの!？」

「ああ。その代わり俺が守ってやるよ。だから頼むぞ」

「……うん！ わかった！」

「わかったか？ んじゃあとりあえず警戒しながら下に降りるぞ」

「ええっ!？ 下に行くの!？ 危ないよお！」

「どの道ここにいたら下から上がってきたあいつらにやられちまうだろ。逃げ出すにはともかく下に行って車をパクるしかねえんだよ」

「うう………わかったよお。でも、ちゃんと守ってね」

「わかってるさ。ちゃんと大事な食料は守り抜かなきゃな」

「私も守ってよう!」

「冗談だ」

こんな状況に陥っても、こいつを見てると和むな。
こいつが馬鹿で助かったぜ。

あゝあゝ言って動く<奴ら>の頭をバットでぶん殴って潰していく。
頭さえ潰せば動かなくなるのは最初の一体で実験済みだ。

胸にモップを突き刺しても生きてたし、それならバットで頭を潰したのだ。

そして正解を引き当てたと。

ついでに<奴ら>というのは仮の呼称だ。

ゾンビって言うには身近すぎるしな、あれはスクリーンの中だけの存在だ。

そんなのは<奴ら>で十分である。

それがわかれば後は複数を一度に相手取らないように叩き潰して進むだけだ。

というわけで職員室へ向かって進んでいく。

車だったら駐車場に止まってるし、その鍵だったら教員たちのバ

ツグを漁れば出てくるだろう。
そのつもりだったんだが……

「先客がいたか？」

「何かあったの？」

「いや、これは……」

戦闘が行われただろう廊下の死体。

頭を碎かれて放置されているこれらの死体から考えて、誰かが絶対にいたはずだ。

それも、結構な人数だな。

「場所から考えて職員室に向かっているんだろうな……よし七星。
お前は後ろを警戒しながらちゃんとして来いよ

「え？ うん、わかった」

これは、急いだ方がいいかもな。

職員室に向かっている奴がただの馬鹿なら、大量の＜奴ら＞をおびき寄せてる可能性がある。

いや、パニックにならず冷静に敵を倒してここまで来ているならそんなことが無いと思いたい。

それにさっき鳴らされた火災報知機も気になる。

できるだけすぐに職員室までいけばいいんだが……

「ん？」

「にゃ？」

遠くの方から聞こえてくる叫び声と小さいながらも聞こえてくる空気の破裂音。

運の悪い事に職員室の方からだ。これであいつらが集まってくる事になったら厄介だな……やれやれ。勘弁してくれよ全く。

「七星、スピードを上げるぞ。しっかりついて来い！」

「うん！」

廊下にいたく奴らゝの頭を走りながらぶっ飛ばし、俺は職員室へと走った。

「ったく、ついてない。ついてないね」

「おや、秋一君か。七星も……ちゃんといるようだね」

「わーん！ 冴子だあゝ！ 無事で良かったよあゝ！」

「うう……みんな走るのはいよいよあゝ」

「んなこと言っていないでさっさと走れ馬鹿！ 鞠川校医も！」

「「無理言わないでえゝ」」

職員室に向かう途中で鞠川校医を連れた冴子と合流した。

木刀を持って戦闘準備も万端なようだ。

ま、そうだよな。

不良に過剰暴力を振るった上で、俺と木刀片手に激闘を繰り広げるような女だ。

そう簡単に死んでもらっちゃ困る。

「状況の把握はできてるか？」

「うむ。あいつらに噛まれてしまえば終わりという事だろう？」

「わかってるじゃねえか。頭を潰せばいいってことも当然わかってるな？」

「当然だ」

「それでこそ俺が認めた女だぜ」

ま、武器だけしか持ってないのはいただけがないがな。

キチンと食い物やら飲み物も調達しとかないと長持ちしないぜ。

「君は全く……こんな時も変わらないのだな」

「はっ！ 言ってる！」

職員室前に到着すると、見知らぬ二人組が奮戦しているところだった。

ついでに他の道から男女の二人組がやってきた。金属バットとモッ

プを持っている。

……男の方は素人だが、女の方は何かやってるか？
いや、確かアイツ、去年にクラスで見たような……
ちょうどそいつらと目があつたので今は力を合わせる事にする。

「右の二匹をやる！」

「麗！」

「左を抑えるわ！」

「……残りは全部やってやるよ」

そこからはすぐにケリがついた。
正直言つと後ろから新しいのがやってこないか心配だったが、それも杞憂に終わるほどの早さだ。

「やあああつ！」

どこか見覚えのある女がモップを持ってく奴らへの至近距離まで近づく。

反応できるわけもないく奴らへの顎に向かってそれを突き出し、頭部を破壊させた。

「ほつ……」

「感心してねえでとつとやろうな」

「ふつ……わかつている」

<奴ら>との間合いを詰める間にあの女が<奴ら>を仕留める様子を見て冴子が笑い、俺はそれを窘めた。
まあ確かに見事だったが、自分の仕事はきちんとやろう。

そのまま目の前に来た<奴ら>2体を、真っ向から面打ちを放って行動停止にさせた。

さすがの腕前だ。音が重なって聞こえたぜ。

俺も負けじとバットを構え、<奴ら>の頭に向かって一閃一閃と続けて横一文字にぶん殴った。

<奴ら>は物の見事に脳みそをまき散らして吹っ飛んだ。これでも動けないだろう。

バットは重心が偏ってるからやりにくいんだが……まあ、強度があるから十分だろう。重さ関係なしにヒュンヒュン動かせるのは剣道やってたおかげだな。

そんなこんなでその場にいた<奴ら>を全滅させた後、見覚えのある女と鞠川校医が襲われていたツインテール女に駆け寄った。どうやら皆知り合いらしい。

ついでに冴子と七星も後輩組と自己紹介に入っているので俺も混じる事にした。

「3年B組の御剣 秋一だ。まあ、仲良くやろう」

そう言って口を笑顔の形に変えてみる。

悪人顔と言われてはいるが、印象改善のために笑顔を見せるのは悪くない。

こんな状況では後ろを守る人間は多い方がいい。

そうやって自己紹介されてて思い出した。

モップを持っていた槍術部の宮本 麗という女。
留年したんだったか。真面目そうだから何か理由があるんだろうが、
今となってはどうでもいいか。

宮本と一緒にいた男は小室 孝というらしい。
特徴が無いのも特徴……だったか。

太っているメガネをかけた男は平野コータ。
釘打ち機を銃の代わりにするとは中々やるな。
能ある鷹は爪を隠すという奴だったようだ。戦闘の様子は見ていないが、既に倒してあるく奴ら>を見る限り、射撃技術も優れているのだろう。

最後のツインテール女は一時的にパニックを起こしていたため他から聞いた。

名前は高城 沙耶。さっき自分で叫んでいた通り天才らしい。
他人から見てもそうだということはよっぽどのだろう。非常時に置いて冷静になったから生き残れたんだろうが……今はそれがパンクしたということか。

それに俺と七星、冴子に鞠川校医を加えた集団は職員室の中のく奴ら>も片付けて一時的に休息の場を得た。
お次は来るまでの脱出を図らねばならないだろう。
その前に体力の回復にでも勤めるか。

「七星、そのバッグをその机に置いて開け」

「はい」

「秋一？ 何をする気だ？」

「みんな疲れてるだろ？　少しは食い者と飲み物を取った方がいい
ってもんさ」

——俺達は『仲間』なんだからな？

第一話 さようなら日常、こんにちは非日常（後書き）

あとがき

アニメ化が始まってたから一巻を買った頃に書いた奴をあげてみた。

更新は………するよ？

需要があるなら………うん。

第二話 準備と脱出のため。 (前書き)

手を組もつてわけだ。

第二話 準備と脱出のため。

こんな世界で生きる事、それは地獄に居続けることと何が違うんだろつ。

生き延びて生き延びて……生き延びた果てに何があるんだろう。

俺には分からない。

平穏な日常も、壊れた日常も、どちらにも嫌悪を感じる俺には。

そう、結局はそういうことだ。

でも俺はただ死にたいとは思わない。

そうさ。誰かのために生きるとか、できるだけ生きたいとかそんなんじゃないくて。

そう……俺はきつと――

学園黙示録外伝 御劔紀行録

第二話 俺達のこれから生きる道

「落ち着いたか？」

「私は大丈夫だよみっちゃん。みっちゃんが一緒にいてくれたから」

「……そうか」

職員室の扉はバリケードによって封鎖され、俺達はつかの間の休息を得る事が出来ていた。

「あの……御剣先輩？」

「なんだ？ 小室」

「この食料どこから持ってきたんですか？ というか、準備がいいですね」

「ああ、俺は屋上でサボってたんでね。いち早くこの事態に気付いた。だから他の生徒が教室からいなくなった後に鮑を漁ったのさ」
「私も手伝ったんだよ！」

「弁当だつてあのままあそこで腐るよりは食ってもらった方が幸せだろうさ」

俺の言葉になるほど頷く小室。

どうやら俺は食料と飲み物のおかげで結構好意的に見られているらしい。

というか鞠川校医や七星のおかげで少しだが場が和んでいる気がする

る。

「あゝちようどお腹すいてたのよ」とか「お腹ぺこぺこなんだ」とか。

どっちを誰が言ったかはわかるからともかく、思わず俺がこう呟いたほどだ。

「太りますよ」

そう言った途端に頬を膨らませて二人に睨まれたが。

甘いもの……というか菓子パンばっかじゃ太るだろうと思うんだが。

ともかく、いったん落ち着いたので行動の準備に入ろう。

「鞠川先生、車のキイは？」

俺が行動しようと思ったたら小室が声をかけた。

……そういえば、車に乗るために来たんだったか。

「あ、バッグの中に……」

そう言つて職員室にあった鞆の中を探し始める鞠川校医に、俺はふと気になった事を言った。

「鞠川校医の車は全員乗せられる車か？」

「うっ」

鞆の中に手をつっ込んでいる鞠川校医の動きがピタリと止まった。

「無理よ……だってコペンだもん」

「部活遠征用のマイクロバスはどうだ？ 壁の鍵掛けにキイがあるが」

冴子の言葉に窓の近くにいた平野が外を確認した。

そして駐車場にあるマイクロバスを見つけて指差した。

「まだあります」

キイを探すのを止めた鞠川先生が話し込んでいる小室に振り向いた。

「バスはいいけど、どこへ？」

「家族の無事を確かめに行かないと。近い順に家を回って家族を助けて、それから安全な場所を探して……勤務先にいるかもしれないけど」

「見つかるはずよ。警察や自衛隊が動いてるはずだもの。地震の時みたいに避難所とかがあるはずだわ」

高城が冷静に自分の意見を述べて見せた。

このメンバーの中でも特に落ち着いているのは俺と冴子と高城だろう。

状況判断力が高いと言い換えてもいい。

その時に宮本がテレビをつけたので皆の視線がそちらに移った。

<奴ら>の事が当然のごとくニュースとなっていた。

「暴動ってなんだよ！」

「これはひどいな。隠蔽工作か」

チャンネルを色々と回すが、全てのチャンネルが暴動が起きているとだけ放送している。

「それだけ……？　なんでこれだけなんだよ！」

「大方、混乱が広がるのを防ごうとでもしてるんだろっさ」

ま、無駄だろうけどな。そう付け加えてガムを口に放り込む。

慌ててもどうにもならんのは確かだからな。ガムでも噛んで落ち着くさ。

見ていても仕方が無いので、俺は宮本にテレビを消すように指示を出した。

「世界中に奴らが……」

驚く小室に、

「そんなー……。朝ネットをのぞいたときはいつも通りだったのに……」

朝、ネットをのぞいていたらしい平野も信じられないといっている。

当然だ。

本来、このような非現実が起こりうるはずが無いのだから。

……起こってしまった今ではそんな考えも意味が無いだろうが。

「信じない……信じられない……たった数時間で世界中がこんなになるなんて……」

宮本が今この町や世界中で起こっていることを信じられず、小室の腕あたりの服を掴んで言った。

「ね、そうでしょ？絶対に大丈夫な場所…有るわよね？きっとすぐいつもどおりに！」

宮本はこの状況がすぐによくなると……何もかも元通りになると言っ
てはいるが、無駄だろう。

「なるわけないしー」

高城も同じことを思ったのか声に出してその言葉を遮った。
そんな高城の態度に小室は怒りを覚えたのか高城にこういった。

「そんな言い方することないだろ」

「パンデミックなのよ？仕方ないじゃない？」

「パンデミック……」

鞠川校医がもう一度高城の言ったことを口にした。

「感染爆発のことよ！世界中でおなじ病気が大流行していること」

高城はパンデミックについての説明を始めた。

「インフルエンザみたいなものか？」

小室はパンデミックの例えをインフルエンザに例えて言ったが高城

は説明を続けた。

「1918年スペイン風邪はまさしくそう。細菌だと鳥インフルエンザにその可能性があるといわれてたわ インフルエンザをなめちやいけないのはわかってるわよね？ スペイン風邪なんか感染者が6億以上 死者は5000万人になったんだから……最近だと新型インフルエンザで大騒ぎになったでしょ？」

「どちらかって言うと14世紀の黒死病に近いかも……」

「そのときはヨーロッパの3分の1が死んだわ」

今はそんな状況じゃないと思うけどな。

正直言つて病気なんかよりはずっとヤバイ。

「どうやって病気の流行は終わったんだ？」

どうやって終わったかを小室が効いてきたので俺が代わりに答えてやることにした。

「そんなもん……人間が死にすぎると大抵は終わりだ。感染すべき人がいなくなるからな」

「でも、死んだ奴ら動いて襲ってくるよ」

平野がブラインドから校庭を見ながら言った。

「だから厄介なのさ、それに、予防なんてものもないからな。噛まれれば一発で死ぬ」

それこそ噛まれなかったためにはフルプレートの全身鎧が欲しいところだ。

「拡大がとまる理由はないということか」

「ああ！これから暑くなるし肉が腐って骨だけになれば動けなくなるかも」

鞠川校医の言ったことに冴子が聞いた。

「どのくらいでそうなるんだ？」

冴子のその問いに鞠川校医が答えた。

「夏場なら20日程度で一部白骨化するわ。冬だと何ヶ月もかかるけど……とにかくそう遠くないうちには」

希望に満ちたように言う鞠川校医だが、言ったそれを高城が否定した。

「腐るかわかったもんじゃないわよ」

「どつという意味だよ？」

どつということが分からないのか小室が沙耶に聞きたい。

「動き回って人を襲う死体なんて、医学の対象じゃないわ。下手をすればいつまでも……」

「まあ今の状況事態医学とか気にするのが馬鹿らしくなる状況だか

らな。腐るのなんて当てにشتهられないだろ」

「そついうことよ」

それを聞いた冴子が口を開いた。

「家族の無事を確認した後へリポートに向かう。ともかく好き勝手に動いては生き残れまい…チームだ…チームを組むのだ」

冴子の言葉を聞いて俺たちは武器を持った。

そろそろ休憩も終わるか。あゝあ。嫌になるね全く。

「出来る限り生き残りも拾つていこう…」

「ああ…」

「はい…」

「どこから外へ」

「駐車場は正面玄関からが一番近いわ」

「あつちには数が多いから気をつけなきゃな……」

「うう……大丈夫かな……」

みんなの準備が終わると小室が口を開いた。

「行くぞー!!」

そうして俺達は、脱出するために行動を開始した。

第二話 準備と脱出のため。(後書き)

あとがき

長く書くとダレるとわかったので一度に書くのはこれくらいでいきます。

もう既に間があいてるんですがね。

アニメも始まったので定期的に書いていきます。

第三話 きつとどこかが狂っていた（前書き）

みんなみんなおかしい。
みんなみんな狂う。

第三話 きつとどこかが狂っていた

幸いにも校舎に残っている<奴ら>の数はそう多くなかった。

全滅したわけではなく、ただ校舎の中に分散しているだけだと思うが……これから駐車場のマイクロバスまで向かう俺たちとしては万々歳ではある。

足音を聞いて後ろから追いかけてくる<奴ら>もいるが、進むペー
スを速めている俺たちに追いつくことは無いだろう。昇降口までは
何の問題も起きないはずだ。

廊下を駆け抜ける途中、嫌でも目に付くのは大量の死体。

パニックの中で生徒同士で自滅したであろう死体や、<奴ら>に無
残に食い荒らされた死体。

後者は突然に襲い掛かってくる可能性もあるので、俺は見つけるた
びに頭に一撃を入れている。

そのおかげで多少嫌悪の籠った視線を向けられることもあるが……
構いやしない。

唐突に命を失うよりはマシだろう。

俺の持つ武器は金属バットから60cm長の金属の棒が二本に変わ
っていた。

というのも、金属バットではいざというときの取り回しが非常に困
難だからだ。

まあリーチが長いという面では有利かもしれないが、冴子の持つて
る木刀のように軽いわけでもない。

そんなわけで俺が思いついたのは、パイプ椅子を解体して武器とし
たというわけである。

もしもの時を考えて、服の中にはもう二本30cm程の棒も入れておいた。

こんなもの使うときになったら終わりだろうな……

そしてそのまま昇降口に進んでいる時――

キヤアアアアアアア！

前方から悲鳴が聞こえてきた。

「階段のほうだ！！」

その声に皆が足音を気にするのをやめて、走り出した。

俺もそれに続いて進む速度を増加させる。

階段に飛び込むと、踊り場で3人の生徒が>奴らしくに襲われていた。

「おらあつ！」

小室が躍り出て平野がそれを援護。

そうして冴子も攻撃に加わろうとする。

――なんで俺たちが脱出する方向で騒ぎを起こす。障害が増えたじゃないか。

一瞬そう思った思考を振り払って、俺は>奴らしくに鉄棒を振り上げた。

何を考えてるんだろうね、俺は。

道中、> 奴ら<から逃げ惑っていた生存者と合流していくうち、昇
降口へ到着した俺たちはすでにかなりの大所帯となっていた。
もう音をあまり立てずに行動するということも難しいだろう。
途中から助けた連中なんて足手まといなだけなのにな。
全く、お人好しな連中だ。
それに従う俺もその一員ということに……冗談じゃない。

「……………」

階段の影から正面玄関の様子を確認した小室が、顔を引っ込ませて
溜息をついた。

「駄目だ。やたらといやがる」

「そんだけここで死んだ奴も多いってわけだな」

「……そうですね」

ここに人が集まって、入り口で詰まっているうちに襲われたか。
そうだとすればそいつらの頭が悪かったただけになるが。
そんな俺の推察に小室は暗い声で返した。
気が滅入るか、そうだろうな。

「見えてないから隠れても意味無いのに」

高木はそう言う。

確かに、＜奴ら＞が聴覚のみで動いているのならば問題ないだろうが、人間の本能としては隠れたくもなるだろう。

「じゃあ高城が証明してくれよ」

「え、い、いやよっ」

嫌がるなら始めから口に出すな。

まあ、現状としちゃあその推論を証明しなけりゃ無事に脱出できなさそうなのは確かだが……

「でも、このままここにいても危険だよ？」

七星の言うとおり、このままここにいるのはリスクしかない。

ここまで来るのに多少なりとも音は出ているのだ。
どこで聞きつけているかわかったものじゃない。

「…玄関を突き抜けるしか無いわね」

全員で一氣に通り抜けるにしろ、一人ずつこっそりといくにしろ、リスクが大きすぎる。

ドアも閉まっているし、誰かが先行してドアを開ける役と＜奴ら＞を引き付ける役をやらなきゃならない。

面倒なことだ……

「——高城君の説を、誰かが確かめるしかあるまい」

その、『誰か』を決めるのが問題なんだが……

後ろの役立たず連中に期待はできない。ヘマをされたら一網打尽だ。

七星は論外。おつちよこちよいだし。万が一のことを考えると戦闘能力のある奴じゃなきゃだめだろう。冴子は強いが、女だ。女に全てを任せて、男である自分が後ろでいるのはなんとも気分が悪くなる。

他の奴らにへまをされるくらいなら俺が行くか……？

「僕が行くよ」

声を出したのは小室であつた。だが、周囲の人物は不安そうな顔だ。失敗することを恐れているのか、それとも小室が死ぬことを恐れているのか。

どっちにしたってそんな奴に任せてられるか。

「ダメだな。俺が行く。小室はここにいろ」

「……えっ!?!」

……おいおい、俺はそこまで信用無いのか？

七星までアホな顔してこつち見てるじゃないか。

「でも先輩は……」

「あのなあ、そんな顔した奴に任せられるわけないだろう。周りの連中も顔に不安を浮かべすぎだ」

「……う……」

「そんなのに任せるくらいなら俺が行ってやるって言ってるんだ。多少強いつて自信もあるしな」

だから俺に任せろと。俺はそう言って小室を押しつけて先頭に出る。そんな俺の服の端を誰かが掴んだ。

「みつちゃん……」

「だからみつちゃんはやめろと言ってるだろうが」

「怪我しないでね。お願いだから……」

「怪我したら死ぬっつーのに怪我できるわけねえだろうが」

「あっ……」

俯くくらいなら話しかけてくるなよな……面倒くさい。

おいそこ、微笑ましいもの見るみたいに見るんじゃねえ。

「っーわけで行ってくるわ」

軽く手を振って階段を下りていく。

極力音を立てないように気をつけて、俺は<奴ら>が徘徊するフロアに降り立った。

腕を伸ばせば届くような距離で<奴ら>が蠢く。

さすがに、若干の恐怖を感じざるを得ない。

（ウロウロしやがって……）

確実に視認できる距離に入っても、こちらに向かってくる<奴ら>はいない。

前後左右を確認、襲ってくる気配はなし。

これで視覚に頼ってはいないことが証明された。

懐に入れてある棒を遠くに投げようかと思ったが、幸いにも足元に転がってるシューズを発見した。

俺はそれを拾い上げ、思い切り投げ飛ばした。

ガゴン、という音が廊下に響く。

おそらくはバケツかロッカーかに当たったのだろう。

その音に引き寄せられるかのように＜奴ら＞はそちらへと動いていく。

しばらく経って、粗方が移動したところで小室を先頭とした生徒たちに合図を送る。

俺は玄関入り口前で全員が通るのを待っていた。

その時だ。

俺は油断をしていたのだろう。

やるのなら徹底的に、頭の片隅に足手まといという単語が出ていた時点で行動するべきだった。

その『足手まとい』が本当にミスする前に、調べるべきだった。

ガキイイイン

最後尾を走る、さすまたを持った生徒。

そいつが玄関を出る時、そんな金属音がそこらじゅうに響き渡った。

それこそ当たり一帯に、さつき廊下の奥に向かったく奴らゝや外回りにいたく奴らゝもおびき寄せてしまふほどに。

「チイツ！ 走れ！」

その音を聞いてこちらを一斉に振り返った連中に、舌打ちしつつ声をかける。

突然の事態に体を硬直させていた生徒も何人かいた。

そいつらも、俺の大声に硬直をやめて一目散に走っていく。

先頭は依然として小室だ。

あいつも、今の状況を理解しているらしい。

少しだけ評価を改めてやろう。

俺もすぐに走り出して、皆に追いついた。
すると、何名かはすぐに声をかけきた。

「みつちゃん！ よかった……」

「無事だったか、秋一君」

「あんなんで死んでたまるか。ったく、だから足手まといは嫌いなんだよ」

「……そのような言い方では誤解されるぞ」

「本心だよ」

冴子も眉をひそめて言う事じゃねえぞ。

「ちょっと！ 何で声だしたのよ！！黙っていれば、手近な奴だけ倒してやり過ぎせたかも知れないのに！」

そう囁み付いてくる高城。

その後ろにはく奴ら>の姿が。それを木刀でさえ子が打ち据えた。

「無茶言うな。あんだだけの金属音だ。声を出そうが出さまいが、どっちにしたってそこらじゅうの奴らが寄ってきてたよ」

「~~~~ツ！」

俺にそう言われて、怒った顔で何かいいたそうな顔をする高城。しかし、前にいた小室が皆にむけて言った言葉に口をつぐんだ。

「話すより、走れ！！走るんだあ！！」

その言葉に背中を押され、皆がバスに向かって一目散に走っていく。一秒でも早く、とにかく前へ。安全なところへと。そんな気持ちを持って、みんなが急いでいた。

「うわぁっ！」

そんな中、後続の生徒たちの一人である首にタオルをかけた生徒がく奴ら>に捕まった。

首にかけたタオルを捕まれ、腕の肉を抉り取るように噛み千切られた。

「あつつぎつぎゃあああああぁあ！」

もうあいつは終わりだ。

噛まれたからには助からない。

「卓造！！」

その男子生徒の悲鳴に、一人の女子生徒が声を上げて振り返った。今にも死にそうな男子生徒の彼女だろうか。

「あきらめて、噛まれたら逃げても無駄よ……！！」

「……ッ！！」

現状を把握している高城の制止する声を、その女子生徒は振り切った。

そして、今まさに＜奴ら＞の犠牲となろうとしている少年の元へかけていった。

……死んだほうが楽というやつだろうか。

この変貌した世界において生きることが苦痛で、支えあはずの愛する彼氏がいなくなつて、死にたくなつたということだろうか。それとも一緒に死のうという奴か、どれも正しいような気もするな。

「なんで、なんでよ！！　ちゃんと教えてあげたのに……信じてない！！」

ありえない、と叫ぶ高城は混乱しているのだろう。わざわざ死ににいった女子生徒の行動に。

それに答えた鞠川校医の言葉は、ひどく絶望的なものだった。

「私、分かるわ」

「ッ!!」

「もし世界中がこんなになってしまったなら、死んでしまったほうが楽なもの」

その言葉に、宮本と高城が顔色を変える。

高城はそんな理屈を理解したくないからで、宮本は……なんだろうな。

「アンタ それでも医者な……」

「あぶないっ!」

激昂した高城の言葉を遮って、平野が高城のすぐ傍まで来ていたく奴ら>を撃ち倒した。

……これであいつらは大丈夫だろう。
俺はすぐ傍にいた七星に話しかけた。

「おい七星」

「へ?」

「お前はと思った」

「え……あの、死んじやった人?」

「そうだ。それしかないだろうが」

何とはなしに聞いてみることにする。

年中アホなこいつならどんな答えが返ってくるのか聞いてみたかつ

たからでもある。

「かわいそうだなって」

「そりゃあそうだろうさ。そうだな、お前があれの立場だったらお前は……」

「もちろん死ぬよ。生きてたつてしょうがないもん」

「……即答だなオイ」

まあ、こいつもアレだ。狂ってる奴のうちの一人ってことか。
あんな鬱状態の俺に話しかけてきたんだから、それも当然なんだろうけど。

ついに俺たちはバスへと辿り着いた。

次々と襲ってくるく奴ら>を、バスの窓から平野の援護がある中で小室や冴子と迎撃する。

「てめえらさつさと乗れ！　いつまでも持たないぞ！」

「……すまんな秋一君。小室君も早く！」

「はい！」

全員乗ったことを確認して、外に出ていた二人をさつさとバスに乗

らせようと急がせる。

手に持った棒をふるってく奴らの頭を弾き飛ばす。
そして俺もバスへと乗り込むことに成功した。

後は郊外に向けて発射するだけ――

「……くれえっ！」

だったはずなんだけどなあ。

「助けてくれっ！」

バスの外、校舎のほうから数人分の助けを求める声が聞こえた。
それを聞いた皆がそちらを向く。

また、助けようとしているのだろう。

こちらに向かって走ってくる連中の先頭にいたのは、3年A組の紫藤。

あんな助ける価値の無い人間でも助けるといっただろうか。

俺はみんながバスの外に連中を見ている中、こっそりと溜息をついた。

第三話 きつとどこかが狂っていた（後書き）

熱くて死にそうな2010年夏。

第四話 大地は紅く（前書き）

空気かなあ……

まあ空気でもいいよね。

主人公はどっかの鬼畜主人公みたいな感じです。

あとキラっぱい思考とか、殺人貴思考とか、いろいろ混ぜています。

第四話 大地は紅く

俺は皆がこちらに向かう生徒のための道を作っている中、じつと紫藤を見ていた。

あいつの親と俺の親はちょっとした知り合いであり、それでいていろいろと複雑な関係というかなんというか。

少なくとも、仲良く食事をともしたり笑って話し合ったりするような関係ではない。

ついでにいうなら、紫藤浩一の性格を俺は多少知っている。

元からクソ親父の知り合いの息子が先生やってるなんて知った時点で警戒していたのだ。

『多少』くらいなら把握もできるというものだ。

俺があいつのことが嫌いなのもそれに起因している。

なんたつて紫藤は時たま『物』を見るような目で生徒たちを見ているのだ。

教師としては確実に失格だろう。

そんな紫藤は現在、腕を振って声を上げながら生徒たちをバスのほうに誘導している。

声を上げることがどれだけ危険なのかわかっていないのだろうか。

しかしあの目はそれ以上に気になる。

おそらくは……いや、今紫藤の後ろの生徒が一人足をもつれさせて倒れた。

その生徒が紫藤の足にしがみついている。
後ろからく奴らくが迫ってきているのだ。恐怖で必死になっている
のだろう。

そして紫藤がとつた行動は……

「クハッ！ やりやがったな……」

「どうしたの秋一君？」

いやなに。皆が見てないのをしっかり確認しながら紫藤が足にすが
る生徒の顔に蹴りをかましただけですよ。

まあ今の状況で足を挫いてるようじゃ、助かったとしても生き残れ
ないとは思っけどな。

実際、俺がく奴らくに囲まれた状態で誰かに足を掴まれたら同じ事
をするだろう。

だからこの狂った世界においては、あいつは確かに正しい判断をし
たといえるだろう。

生き残る力を持たないものは死ぬしかない、この狂った世界におい
ては、だが。

その時振り返ったときに見えた紫藤の顔といたら素晴らしかった
ね。

まさしく自分のためだけに動く人間の顔だった。

俺はそれから視線をはずして運転席にいた鞠川校医とその後ろの席
にいる七星に声をかけた。

「気にしないでいいよ鞠川校医。ちょっと手伝いに行ってくるから、
バス発射準備は済ませといてくれ。七星はそこで荷物をしっかり持

つてろ」

「わ、わかったよう」

「秋一君、前にもいっぱいいるからこのままじゃ危ないわ！」

「それを何とかしに行くんだよ、鞠川校医」

このままじゃ横転する。スピードが出ている状態ならともかく、目の前に大量の＜奴ら＞がいるのではかなり危ない。

なら、倒すのではなく移動させるべきだろう。

俺は七星の持つているバッグの中から『俺の武器を作った余り』すなわち『パイプ椅子の部品』をいくつか手に持って、バスの窓から体を乗り出して屋上へと体を移動させる。

そして、音が離れすぎないように、少し離れた場所にある車にパイプ椅子の部品を複数個投げつける。

バリンと窓の割れる音が連続して響き、バスの周りの＜奴ら＞が多少そちらに移動した。

先ほどまで釘打ち機で援護していた平野も、弾が切れたのか高城あたりに指示されたのか、それを使うのをやめている。

音の発生源がこちらに無くなったため、バスの前にいた＜奴ら＞の数も半減した。

「秋一君！　そこには危険だ、早くバスの中へ！」

「う心配どうも。だが、言われなくてもわかってるっ！」

紫藤たちがバスへと駆け込む中、冴子が俺に呼びかけてくれた。

準備は済んだということだ。咄嗟に俺のために声をかけてくれるとは、さすが冴子だ。

七星あたりに見習わせたいね、その勇気とかなにやらいろいろと。そんなことを思いながら俺がバスの中に体を滑り込ませた途端、バスが急発進した。

「ぬおっと……危ないなオイ」

「大丈夫か？」

「問題ない。それより……」

話しかけてくれた冴子に答えて運転席のほうに向かう。

「……人間じゃない。もう人間じゃない！」

鞠川校医が少々……心配というか、情緒不安定になられると困るので様子を見ておきたいのだ。

<奴ら>をバスで跳ね飛ばしながら「人間じゃない」と呟くのは、少々危ない証拠だろう。

鬱になりかけた経験のある俺だからわかることだ。

「鞠川校医」

「へ？」

肩に手を乗せてちよいとばかり助言をしてやる。

『もう人間じゃない』というのは元々人間だったということであり、その意識で罪の意識も少しは出るだろう。だから語調を強めているんだろうが。

「そんなに気張らないほうがいいぞ。いざというときに柔軟な思考ができないからな」

「え……でも……」

「前をしっかりと見る。見えるのは＜奴ら＞だ。倒すべき敵でしかない。あんたが気に病む必要なんてかけらもない。＜奴ら＞を殺すことは他の人間を助けることにつながるんだからな」

「……気を使われちゃったわね」

「無駄口叩かず前を見る」

「わかってるわ……私は先生なんだから」

「その意気ですね。鞠川校医」

とりあえず、パニクるのは止められたようだ。
バスが横転などしたら全滅だ。平静を保っていてもらわなければならない。

そして、紫藤と違ってこの場にいる唯一の『まともな』大人だ。
しっかりしてもらわないと……

「みっちゃん、ご苦労様」

「本当に疲れるね。慣れないことするのは」

とりあえずバッグの中のカロリーメイトでも食おう。

バスに乗ってしばらく。

窓の外に街中から黒煙が上がる様子が見えた頃。

一人の男子生徒が騒ぎ出し始めた。

それに続いて他の生徒までも。

「だからよお！ このまま進んでも危険なだけだつて！ だいたいなんで俺らまで小室たちに付き合わなければならなんだ？ お前から勝手に町へ戻るって決めただけじゃなか！」

正直言つてとてもイライラする。

こんな状況になつていろいろと考えているので余計にだ。

目の前の運転席にいる鞠川校医もかなりキている様子。

「寮とか学校の中で安全なところを探せばよかったんじゃないのか！？」

おまけに外の景色も最低最悪。

救助へりだかなんだか知らないが、飛んでいるそれから人とく奴ら>がごっちゃになつて零れ落ちるくらいだ。

「そうだよ……このまま進んでも危ないだけだよ……どこかに立てこもったほうが、さっきのコンビ二とか……」

「今からだつて遅くない！ だいたい俺は……」

「もういい加減にしてよ！ こんなんじゃ運転できない！」

ついに鞠川校医が限界に來たようだ。

先ほど俺が言った助言もほとんど無駄になっちまったかな……
面倒なことをしてくれる。

「……はあ」

「みつちゃん……」

「お前は黙ってるよ？ 問題発言はしないようにな」

あまりの空気の悪さに、能天気な七星ですら顔を不安そうにさせている。

……俺も少々キレたくなってきた。

こういうときは一致団結するのが基本なんじゃないかね？
ま、ム力つく相手とは協力する気なんてさらさらないが。

「んだよおっ！ 何見てんだやろうつてのか！」

こんどは発端となった男子生徒が小室に文句を言っている。
対する小室はじっと見るだけ。

多分に、空気を悪くするなよということを考えているのか、それともこんな状況で騒ぐ相手を馬鹿だと思っているのか。
どちらにせよ同感ではあるが。

「ならば君はどうしたいのだ？」

「う……気にいらねーんだよ！ こいつが気にいらねーんだ！ な
なんだ偉そうにしゃがって！」

冴子の問いに小学生のように返す生徒。

どこかのガキか。

頭が幼稚園レベルの可哀相な奴め。

全員がお前のことを気に入らないといった目で見ているぞ。

平野は高城に止められて、冴子は一応構えているが自重、俺は……
いつでもぶん殴れるように棒を手に。

「なにがだよ？　俺がいつお前に何か言ったよ？」

「てめえっ！」

小室が怒って声を返し、そしてついに宮本が動いた。

モップの柄を反動をつけて思い切り男子生徒の腹部にたたき付ける。
誰もやらなきゃ俺がやってたんだがな。

たまらず床へと這い蹲って、胃液を吐き出しながら聞くに堪えない
苦悶の声を漏らす。

……皆が啞然としてるぞオイ。

「みつちゃん、あの入痛そうだね」

「ああそうだな。自業自得だから気にすんな」

訂正、冴子はそのいうのを気にするような性質じゃないし、七星に
いたってはバカだった。

鞠川校医、あんた性格がアレでも医者なんだからこれくらいでビビ
らないでください。

宮本が物の見事にバカ男子を黙らせた後。

唐突にパチパチと拍手をする音が聞こえてきた。

無論、この状況でそんなアホなことやる奴は一人しかいない。

「実にお見事！　素晴らしいチームワークですね、小室君、宮本さん！」

紫藤である。

まあ、こんな状況になりやいずれ行動を起こす奴だとは思ってたが、案外早かったなあ。

「しかし……こうして争いが起こるのは私の意見の証明にもなっています」

すまない。

俺は色々と忙しかったからお前の意見なんて聞いてない。
ついでに言うなら、たぶん七星も覚えてない。

「リーダーが必要です。我々には！」

足手まとい連中を纏めといってくれるなら別にそれはそれでいいけどな。

足手まといと纏めて離れられるチャンスでもあるし。

「で、候補者は一人きりってワケ？」

「私は教師ですよ高城さん、そして皆さんは学生です。それだけでも資格の有無ははっきりしています」

質問をした高城にそう答える紫藤。

いい加減その笑顔は胡散臭すぎると思っただがなあ……

あと教師なら鞠川校医がいるんだが、多分ダメだろうな。

あの人がリーダーになれるなら七星が軍師になれる。

「どうですかみなさん。私なら……問題が起きないように手を打てますよ?」

そういつて腕を広げて後ろの連中に言い放つ紫藤。

どういうわけだか、それで拍手が起きるんだから不思議だ。

『先生』というものに責任転嫁して全て任せてしまおうという思考だろうな。

そしてこの狂った世界で『安心』を得ようというわけだろう。

あの紫藤の下で『安心』なんて、とてもじゃないが想像できないけどな。

そして気障にお辞儀をしてこちらを振り向く紫藤。

そして両腕を広げて言い放った。

「……と、言うわけで多数決で私がリーダーということになりました。今後は……」

こっち側の連中の顔を見る。

……全員が浮かない顔だ。

そのとき突然に宮本が運転席のほうに向かって動き始めた。

「先生開けて……開けてください! 私、降りる! 降ります!」

「え? でもあの」

「おい、いったいどうした」

気になったので俺も一応聞くことにする。
が、無視された。

「っ！？ 麗！？」

小室が驚愕の声を上げ、そのまま宮本は助手席側のドアから外に出た。

<奴ら>がいるから危険だって事を忘れてるんじゃないだろうな……

「麗！」

「おい、外は危険だ！ さっさと中に戻れ！」

「イヤよ！ そんな奴と絶対一緒にいたくなんかない！」

そんな奴つてのは……まあ紫藤だろうな。

それくらい命の危険があるんだから我慢してくれよ……

また空気悪くなるじゃないか。

「行動をとみにできないというのであれば、仕方ありませんね……」

「何言つてんだあんた……！」

紫藤が言ったあまりな言葉に小室が怒りつつ車外に出て宮本の腕を掴む。

俺はそんな光景を見ながら近づいてきた紫藤に声をかけた。

「紫藤先生よ」

「なんですか御劔君？」

「……そういう台詞を言うのは勝手だけどな、あんまりやりすぎると信用をなくすぞ」

「忠告ありがとう。ですが心配は要りませんよ」

心配なんかかけらもしてないから安心しろ。

小室もさっさと宮本を連れ戻して……あれはなんだ？ バス？

「ともかく今は！ っ！？」

そこで大型バスが迫ってくるのに気づいたらしい。

しかしあのバスどうにも様子がおかしいぞ。まさか……

「何やってんだ。ぶつかる……！？」

「おいてめえらさっさと逃げろ！ そこにいるのは危険だ！」

「くっ——」

俺がなんとか外の二人に警告をし、次に見えたのはバスの中の地獄。そしてそのバスが車にぶつかって横転し、派手な爆発が起きたということ。

こっちのマイクロバスまでは被害が来なかったが……外の二人はどうした？

「秋一君……小室君は？」

「わからんね。死んではいないと思うが……」

「小室君！ 大事無いか！」

「生きてたらさっさと返事をしろ！」

炎の向こう側にいるだろう小室と宮本に呼びかける。

これで返事があるのなら多分大丈夫だろう。

ここで音を立てすぎたからさっさと離れたいが……

「警察で……東署で落ち合いましょう！」

「時間は？」

「午後5時に！ 今日が無理なら明日の同じ時間で！」

「おい冴子、あいつらのことが心配だとは思うがさっさとしろ。ここは危ないぞ」

「わかってるよ秋一君。私たちは音を立てすぎた」

わかってるならいいんだよ。

さっさとバスに乗った乗った。

「鞠川校医！ ここは無理だ！ Uターンしてくれ！」

「わかったわ！ 戻って他の道を！」

「小室は無事みたいだから先生は気に病まなくて大丈夫だぞ」

「ありがとう！」

ほうつといたらこの先生、心配事で押しつぶされてそうだしな……
よくこんなんで医者になれたもんだ。

こうして俺たちは町へと向かった。

小室たちはまあ自分で何とかするだろう。

「俺もちよつとやることがあるしな……」

もう死んでるかもしれないが。

あいつなら地下の倉庫あたりに引きこもってそつだ。

まあいい。

このまま町までは乗っけていこう。

「……………」

「どうしたのだ七星？　急に黙り込んだりして……………」

「ううん。ちょっとみっちゃん危なく見えただけだから……………」

第四話 大地は紅く（後書き）

あとがき

主人公は空気の回。
だって……ねえ？

とりあえず最後のは色々と行動するためのフラグ。

えくすとら1話 理由はいるのか？（前書き）

毒島冴子は如何にして友となったか。

えくすとら1話 理由はいるのか？

俺が毒島冴子とであつた時。

それは4年前の俺が中学二年の時だ。

俺と同じ年である冴子も中学二年か。

そのとき俺はかなり荒れていた。

その一年前、中学一年の時に七星と出会い、付きまとわれるようになったのだが、それは特に関係ないだろう。

中学一年の初めに母が死に、それから一年、親父のせいで死ぬほどストレスがたまっていたのだ。

それは強要される勉強でもあり、家の中での扱いであり、とにかく全てといえいいだろうか。

髪の毛の先が白くなりだしたのもその頃か。

そして中学二年の頃の俺は憂さ晴らしに夜の街を出歩くことが多くなっていた。

親父は許すはずが無いだろうが、家に帰らない日もそこそこ多かった。

二度と帰ってくるなと何度も思っていたが、それは夢のような話だった。

だから、家にいない隙を見計らって俺はノルマを終わらせて街に繰り出していた。

そして、八つ当たりをするかのように怒りを街で見かけた不良たちにぶつけるのだ。

当然複数人数を相手にすることもあるが、俺は負けなかった。弱い相手にしか仕掛けなかったこともあるが、俺にはそういう才能があったようなのだ。

子供の頃からずっと、体力測定では運動部のやつらにもそうそう負けたことが無かったからな。それもあるのだろう。

一度も会ったことの無い相手に喧嘩を売り、それを意識を失うまで蹴る事が快感だった。

唯一のストレスを発散する機会が与えられたと、俺の脳が普段の三倍は活発に動いているような気分だった。

心臓がうるさいくらいに鼓動して、相手が倒れて恐怖の表情を見せると更に気分が高揚した。

その時だったか。毒島冴子に会ったのは。

|| || || || ||

偶然に遭遇したといっているだろうか。

まさに偶然だった。

不良たちを叩きのめした木製バットを片手に家へと帰る途中、同じ中学の制服を着た女子が男に襲われているのに遭遇した。

上位者である男が弱者である女を襲うのは、自分が不良たちを叩きのめすのと同じなんだろうと妙に納得した。

そして俺はそのまま音を立てないように近づいていった。

知り合いなら、助けてやらないことも無い。

加害者である男が一転してただの弱者に成り下がるさまを見るのも

悪くない。
そう思っていた。

しかしだ。俺の予想とは遥かに違う事態が起きていた。

ボグリという嫌な音の後に、続けて骨の碎けるような音が静かな夜道に響き渡った。

そして悲鳴を上げる男。

これは間違いなく襲われていたはずの女がやったんだろう。

そしてその女が悲鳴を上げる男に止めを刺すべく木刀らしきものを振りかぶった。

そしてピタリと動きを止めた。

その視線は確かにこちらを向いている。

夜の闇の中でもなぜかはっきり見えたその目は、いつかミラー越しに見た俺が不良を倒すときの目に似ていた。

その目は確かに、敵と戦って倒すことに快楽を見出す人間の目だった。

彼女は俺を敵として認識しているようだった。

そのまま持っていた木刀を正眼に構えた。

俺が持っていた血に塗れたバットが、微かな光に反射したの悪かったのか。

それとも俺も彼女と同じような目をしていたのが悪かったのか。
ただ単に襲われている状況で武器を片手に持っている俺が現れたのが悪かったのか。

なににせよ。

俺はそのとき初めて勝てるかどうか分からない戦いをすることに

なった。

ギラギラと目を光らせた木刀所持の女が、滑るように俺に近づく。重心のブレがかなり少なく、先ほど男を叩きのめしたところから見てもかなりの腕なのだろう。

対して俺は、バットを右手にもって左半身を前方に出す。

そのときの俺は一種の興奮状態で、暴走していたんだろう。おそらくは相手の女も同じく。

俺と女はどちらともなく互いに向かって攻撃を仕掛けた。

ガキリと鏑迫り合いになって、至近距離だったので互いの顔がよく見えた。

今は唇の端が狂喜に歪んでいるが、かなりの美人だ。釣られてこちらにも笑ってしまった。

そのまま幾度も武器をぶつけ合う。

バットに引つ張られないように小出しに攻撃を仕掛け、蹴りや腕による攻撃も混ぜる俺。

おそらくは剣道の有段者なのであろう、素早い動きで木刀による鋭い攻撃を繰り返す女。

自然と喉の奥でクツと笑い声が出る。

俺は弱者を蹴ってストレス解消していたはずだ。

なのに今、俺が感じている感情は何なのか。

強い女を屈服させたいという本能か、それとも目の前に敵がいるから戦いたいという本能か。

しかし、きちんとした戦いの経験を積んだ人間に、俺が敵うはずも無く。

ちよっとした隙に、バットを持っていない左腕に木刀が思い切り振り下ろされた。

その力に逆らうことなく腕を動かしたので、体勢を崩しながらも俺は大きく後ろに跳び下がった。

そしてちょうどその時。

遠くのほうからパトカーのサイレンが聞こえてきた。

おそらくは近隣住人が通報したんだろう。

捕まったら家の地獄が更にひどくなると思った俺は、その場から一目散に逃げ出した。

後ろからあの女が追いかけてくる足音も聞こえたが、すぐに聞こえなくなった。

翌週、月曜日の昼休み。

その頃には一撃貰ってしまった俺の左腕も、若干違和感はあるくらいまでには落ち着いていた。元々そうたいした怪我でもなかったのだろう。

そして昼飯を食おうと屋上に移動し、いつもどおりに七星がやってきた。

こいつのいう『友達』に俺がなって以来、俺と一緒に飯を食おうと付きまってくるのだ。

そして今日、俺以外に友達がいないといていた七星が、新しくできた友達とやらを連れて来た。

その女こそが、つい数日前に俺と戦った毒島冴子だった。

〓 〓 〓 〓 〓 〓

毒島冴子は悩んでいた。

男に襲われたことについてではない。

襲われ、それを自己防衛の名目を持って撃退したときに抱いた己の気持ちに。

そして、どういうわけだか戦ってしまった相手の男。

血が付着したバットを持っていたし、危険であるのだろう。そう考えれば戦ったこと自体は問題ではない。

だが、わかってしまった事が一つだけあった。気づいてしまったことがあったのだ。

それは、自分と同じ年代の女子が持っているべきではないもの。

相手より優位に立ち、弱者を倒し勝つことに快感を感じるということ。

だから、バットの男が浮かべていた笑み。

それを自分も浮かべていて、きっとその男と同じ目をしているのだろうとわかってしまった。

家に帰ってから考えたのはそうだったことだ。

親はもちろん心配してくれたが、何もされていないと知って安心し

ていた。

そして私は、バットの男が自分と同年代であろうことに気づいて『恐れ』を持っていた。

自分がかの男と同じく、乙女などとはとても言えないような心を持っていると、同年代であろう男に知られていることを恐れた。

そして、その気持ちを知った自分が今までどおりでいられるのかということに……

そうしていたことが態度に出ていたのか。

それともその女子の勘が優れていたのか。

朝のHRが始まる前。高槻七星という女子生徒が、おそらくは話したこともないはずの自分に声をかけてきた。

「あの、何か悩み事でもあるんですか？」と。

何も接点の無かった自分にかける言葉ではないだろうと思ったが、私は少し尊敬した。

決して態度に表したわけでもないし、いつもどおりにしていたはずだったが、悩み事があるのかと気づいた彼女を。

互いに自己紹介をして、多少の雑談を試みれば、彼女はとても優しい性格をしているのだとわかった。

……自分とは違って、人を傷つけることなど考えることもなさそうな性格だった。

それなのに、彼女にはたった一人しか友達がいなかったのだという。

その理由はそのたった一人の友達が浮いているからで、彼女も彼女でかなり変わっているからだそうだ。自覚はあるのだろうか。

そうしてもうすぐHRが始まるという頃になって彼女が言った。

「あの、お友達になつてくれないかな？」

「もちろん、私たちは友達だとも」

私がそう言つと、彼女は本当に嬉しそうな笑顔で笑つた。

彼女の性格なら、私の歪んだ心のことを話しても笑つて流してくれる気がする。

いつかはこの事を話そう、そう思う。

少々気になつたので、たつた一人の友達というものの事を聞いてみた。

その友達の男性生徒の名は御劔秋一、七星は今度紹介するねと言つてくれた。

こんなに優しい七星の友達なのだ、その者もきつといい人間なのだろう。楽しみだ。

週が明けた今日、七星につれられて屋上へと向かう。御劔秋一は屋上で昼食を取るのだとか。

そして……私は目の前にいる人物を前に、目を見開いて硬直している。

信じられないという気持ちでいっぱいだった。

そして、なんとという偶然なのだろうと思つた。

そこにいたのは、あの夜に私と戦つたバットの男だったのだ。

ものすごい偶然だと思いながらも、俺は話しかけることにした。
間の七星がアホな顔して首を傾げてるし、さつさと飯を食いたいか
らな。

「奇遇だな。あの夜以来だな」

「っ！ ……やはり君がそうなのか」

「とつくに気づいてるだろ？」

「……………」

ちよいとふざけすぎたようだ。

殺気を出してこちらを睨むのは少しやめてほしい。

「あの、みつちゃんも冴子も喧嘩しないで、ね？」

「……………いや、空気読めよ七星」

「……………すまない。私もいきなり構えてしまったようだ。ありがとう」

七星なんぞに礼を言う必要は無いぞ。そこの……………誰だ？

「とりあえず自己紹介しよう。俺は御劔秋一だ。あんたは？」

「私は毒島冴子だ。それより、君は……………」

「私は高槻七星だよっ！」

「お前はしなくていいんだよ」

「ひうつ！ たたかないでよう」

これは叩いたのではない。ツッコミをしたのだ。

それよりも毒島が何か聞きたそうだからいろいろと答えてやるか。互いに共通点を持つ者同士……な。

「そ、そうだったのか。あの時は痴漢の仲間だとばかり……」

「そう気にすることは無いぜ？ 俺があんな時間にあんな格好でいたのが悪いんだからな」

「そうだよ冴子、みっちゃんが全部悪いって言ってるんだしあいたあ！」

「全部悪いとは言ってねえよ」

お前はいつも一言多いというか、むしろ余計な口を挟むな。まだなんか聞きたそうだな？

「君は……あんな姿でいたのはやはり……」

「ああ？ 同類の毒島ならわかると思うんだけど？」

「っち、違う！ 私はそんな……」

「あの夜で互いにわかりあっただろう？ 嘘は通じないよ」

あの夜、俺の目の前に立つ毒島冴子の姿は、紛れもなく俺と同じ目をして笑っていた。

そんな破綻した者の姿だったよ。

「……君は、それで何も思わないのか？」

「何をだよ」

「私はあの時、明確な敵が得られたことが楽しくて仕方が無かった。木刀を手に持ち、相手よりはるかに有利にたっていると理解した後、私は相手の油断を誘って躊躇うことなく逆襲した」

「それがどうした」

「私はそうしたことが楽しくて仕方が無かった！ 本当に楽しかった！ 君と戦っているときもそうだ！ 君が私と同じく笑みを浮かべているとわかってからは、それをいかにして倒すかということに夢中だった！ それすらも楽しかったのだ！」

「だからどうしたというんだ」

「っ……後で冷静になって思った。そんな私のどこが少女なのだろうと。そして七星と会ってからには特にだ。私と違って普通の感性を持つ少女であることが羨ましくて少し眩しかった。だから余計に、自分がどれだけ醜い存在なんだと思ってしまうた。御剣君は違うのか？ 七星の友達なのだろう？ そう思ったことは一度も無かった

のか？」

そう、毒島は俺に問いかけた。

自分が普通の少年であるかどうか？ 少女であるかどうか？
そもそも、そう育てられてすらいないというのに？

「……くだらないな」

「……っな！？」

「それだけ悩んでいるのなら、いくら狂ってもお前は正常に戻るだろう。ならばそれは狂ってるうちに入らない」

「だが私は！」

「俺の意見としてはな。自分の狂気を自覚して、それを直そうという時点で『まとも』だと思うぜ。少なくとも、自分から敵を探しに行つて叩きのめしている俺からすればよっぽどまともだ」

「……………」

「そして俺は七星を羨んだりなんてするわけが無い。こいつは馬鹿だからな。そんなのを羨むわけが無いだろう」

「ちょっと！ ひどいよみっちゃん！」

「毒島も、少し考え方を換えればいいんだよ。そんなに悩んでるんなら考え方を変えてみる。狂っても大丈夫だってな」

「それは……………」

「俺は狂ってる。お前と同じでな。普通の少年じゃないってところか？ そんな俺は七星の友達だ。でもこいつは離れていかない。ならお前の場合もそうだろう？ 全く変わりやあしないな。そんなもんは個性の一つなんだよ。加虐趣味とか？ そんな具合にでも軽く考えてればいい。じゃないとその綺麗な髪も俺みたいに白くなつまうぜ？」

「……考え方を変えてみる、か」

ポツリとつぶやく毒島。

一応なんか考えてるようだから言うておく。

「いきなり自分の考えを語るのはやめろよ？ それより飯にしよう」

「はいっ！ 私もお腹すきました！」

「……そうだな。昼食にしよう」

とりま、そうやって毒島冴子は俺と七星と友達になったわけである。

ちなみにその後は、俺が警察から逃げた後にどれだけ大変だったかを毒島が教えてくれた。

バットの破片とかかなり散らばったからなあ……悪いことをしたものだ。

えくすとら1話 理由はいるのか？（後書き）

あとがき

主人公のキャラはランスとかの鬼畜さんがメインの構成です。いろいろ複雑ですけど。

七星はシイル的なキャラですね。

戦国ランスでいうなら冴子さんは謙信ちゃんみたいな感じかと。強さ的な意味で。むしろ五十六？

言われてないけど、七星も結構狂ってます。どっかの？みたいな感じですけど。

第五話 黒き復讐 白き恋（前書き）

タイトルに意味はどことなくあります

第五話 黒き復讐 白き恋

外はいい感じに渋滞していた。

これならしばらくはこのバスも進まないだろう。

……俺の目的を果たすにはちょうどいいかもしれない。

まあ、こんな状況じゃなかったとしても俺は決行していただろうが。

「鞠川校医、ドアを開けてもらえるか？」

「え？」

「ちょっと待て、君は何を……」

鞠川校医が首を傾げつつこちらを向き、冴子が俺の肩を掴んで強い口調で疑問を口にする。

しかし、それは俺を止める要因にはなりえない。

「やることあるんだよ。そのドアを開けてくれ」

「ダメよ。いったい何をするつもりなの？」

「そうよアンタ！ 小室たちを追いかけても言うの？」

「んなわけないだろ。俺にはやらなきゃならんことがあるんだよ」

「あの……それは今やらなきゃならないことなんですか？」

「ああそうだ。今やらなきゃいけない事だ。だから邪魔をするな」

前のほうに乗るお人好し連中の言葉を切り捨てる。

後ろのあいづらは知らない。紫藤の演説でも聞いていればいい。とにかく、俺にはやらなきゃならんことがあるのだ。

「開けないのか？　なら窓から出て行くぞ」

「待ちたまえ！　秋一君、一人で行動するのは……」

「危険ってか？　そんなもん俺の勝手だろ冴子」

窓を開けようとした俺の腕を冴子が掴み、俺は彼女としばし睨みあう。

そこへ横合いから口を出した者がいた。

「……行かせてあげれば？」

「高城さん、いいんですか？」

「いいじゃない。っていうか、止めても聞きそうにないし。本人が行きたいって言ってるんだから仕方ないでしょ」

「だ、そうだが？」

「……くつ。それもそうかもしれないな。だが……七星はどうする気だ？　彼女も置いていくのか？」

一旦俯いた後、すぐにこちらを見つめながらそう聞いてくる。

それを聞いた俺は、呆然とした表情でこちらを見る七星を見て、すぐに冴子に視線を戻した。

「さあな。ここにいたほうが安全なんだから冴子に任せるさ」

「だが。それで「嫌だよう……あたしはみっちゃんといたい！」……七星はこう言っているぞ」

「……知らないな。俺の目的にそんな馬鹿をつき合わせるつもりはない。正直、邪魔なんだよ」

「うっ！」

「秋一君！ 言いすぎだ！」

「それこそ知ったことじゃない。俺は本当のことを言っただけだよ。それじゃ俺は行くぞ。目的地は近くなんでね」

窓を開けてそこから抜け出そうとすると、後ろから強く引かれる力を感じた。
そちらを振り向いてみれば、いつの間にか近づいてきていた七星がいた。

「行かないで……お願い……」

「悪いな。俺にはどうしてもやらなきゃならないことがあるんだよ」

「待つて……みっちゃん！」

手を振り払ってバスの外へと俺は降り立った。

その音に反応して近づいてきたく奴らゝを懷から出した鉄棒で頭を殴って撃退する。

頭を陥没させて沈むく奴らゝには目もくれず、俺はその場から早足で去る。

極力音を立てないように気をつけつつ角を曲がれば、すぐにバスは見えなくなった。

「……行くか」

足手まといもない。

今俺がやらなきゃならないことは……唯一つだ。

|| || ||

「みつちゃん……」

七星は窓から秋一の消えた角をじっと見つめていた。

その声にはいつもの元気そうな印象はない。

か細く消えてしまいそうな声だった。

「七星……元氣を出せ。彼がああ言ったのもきつとお前を心配してのことだ」

「……冴子、私って邪魔なのかな。やっぱり役立たずだよな。荷物持ちくらいしかできないもんね」

「そんなことはない。君がいるということが大切なのだ。特に、私

や秋一君のような人間にとっては」

そう言つて冴子は、心を喪失したかのように立ち尽くす七星を抱きしめた。

彼女にとつても七星は特別な存在であつた。

平和と日常の象徴であり、自分を守るべき友人。

それが毒島冴子にとつての高槻七星なのだ。

「にしても、何の用があつたんだと思いますか？」

「あたしに聞かないでよ！ 何か悪い事でもやろうとしてんじゃないの？」

「うゝん。秋一君はサボリ癖はあつても悪い子じゃないはずなんだけど……」

平野と高城、鞠川校医が今しがた起きた出来事に少し関心に向け、すぐに考えの矛先を変える。

その矛先はいよいよ新興宗教じみたことを言い出した紫藤だ。

「マジヤバイわね」

戻つてくるとも言わずに出て行つた秋一のことは一旦忘れ、高城はすぐに行動を起こそうと仲間達に促した。

〓 〓 〓

<奴ら>の群れを掻き分けて目指す場所へと行き着いた。
道中、人が逃げ出そうと橋に集まってきているためか、何人もの人間が<奴ら>に襲われているを見た。

そしてそれを囫にしてお逃げ出そうとする浅ましい人間も。

目の前にあるのはそこそこ大きめの家。

ちよつと前まで俺の住んでいた家だ。

ドアには鍵がかかっていたが、俺はそれを破壊して中に侵入した。

中に<奴ら>の姿はない。

そして居間に進めば、慌てて何かを片付けたような跡。

そこら中に散らばる家財に書類。

おそらくは相当慌てていたのだろう。

俺はとりあえず冷蔵庫をあさる事にした。

「……ここも荒れてるか」

中身はほぼ空だが、水と牛乳があるだけマシか。

ここまで来るのに少し体力を使ったのでとりあえず水分を補給する。

ここまでくれば急ぐこともない。

おそらく、奴はこの家にとどまっているはずなのだ。

何かあればそうしろと、あいつ自身が言っていたのだから間違いない。

まだこうなってから一日も経っていないのだから、まだ大丈夫なはずだ。

あいつがいるのは二階の書斎か、それとも地下の倉庫か。

……とにかく向かうしかないか。

しかし地下倉庫には見つからず、二階に上がってみても書斎には姿なし。

とすれば、残りは寝室しかないが……この状況で？
行くしかないか。

寝室のドアに近づいてノックをすれば、中から微かに人の動く気配がした。

やはりここにいるということの間違いないらしい。

俺はまた鍵がかかっていた扉をぶち壊し、中へと侵入した。

そこにいたのは中年の肥満男と、その女の横に寝ている若い女だ。

「おお、お前か！ お前が来るのを待っていたぞ！」

男が俺に話しかけてきた。床に大きく膨らんだ鞆があるのを見る限り、準備が終わってからはずっとここにいたようだ。

無駄に防音設備の行き届いたこの家ならば、確かに音を気にせずそういったこともできるだろう。

だが、この状況で女と寝ているなど、このような男が俺の父親だなんて信じられないな。

「逃げ出す準備ならもうできている。さあ逃げるぞ。急がないと危ないからな」

「……そうですね。急ぎましょう。俺もさっさと済ませたいからさ」

今なら完全に油断しているし、簡単だろう。

そう判断した俺は、台所で入手したナイフを狙い定めて投げつけた。だがしかし予想外のことがおきた。

今まで寝ぼけていたのかわからんが、目を覚ました女が咄嗟に逃げようとして大きく身動きしたのだ。

そのためか、俺が投げたナイフは女の首に突き刺さった。

父は何が起きたのか理解できないでいたようだが、自分が狙われていることを理解したのか、女の首に突き刺さったナイフを抜いて俺に向かつて構えた。

そのせいで女の首から大量の血が流れ出るが、父はそれを無視した。女が助けを求めるように手を伸ばすが、それをベッドの下に蹴落としてこちらを睨みつけてくる。

「秋一！ お前は何を考えている！」

「俺はあんたを殺したいだけだよ」

「……っ今までしっかり育ててやっただろう！」

「は！ よく言う」

俺は苦勞した記憶しかないな。

目の前にいる男が俺の父親だろうと、殺したいという気持ちに変わりはしない。

まあ、女については不運だったただけだな。

「そんなたるんだ体で何ができる。おとなしく地獄へ行け」

すり足でベッド脇にある棚に近づこうとしている父に告げる。

それを聞いて急いで棚を開いて何かを取り出そうとする父に近づいて、その腕に思い切り鉄棒を振り下ろした。

父は叫び声を上げて、棚から取り出した銃を床へと取り落とした。

俺は銃を遠くへと蹴り飛ばして、振り向きながらナイフを振りかぶる父の首へと鉄棒を振り下ろした。

骨の折れる音が聞こえ、一瞬にして沈黙した男は床へと崩れ落ちた。

これで終わりか。

案外、殺ってしまったえばあっさりしたものだったな。

無関係の女を殺すことになったのは予想外だったが……こんな世界だ。

法律も何も意味のないものだろう。一人殺すも二人殺すも変わらないさ。

嗚呼、憎かったこいつを殺せばスカッと思うってたんだけどな。

どうやら、そうでもなかたようだ。

これからどうするか。

この家に留まるのは無しだ。俺はこんな家にいたくはない。つらい思い出しかないこの家には郷愁の念など欠片もない。

そういえば、あのバカは最後まで俺に縋っていたが何をしているだろうか。

……安全面で言えば一人にいるよりも人数が多いほうがマシだな。

あのバスがアレからどの程度移動したのかは知らないが、そう離れてはいないだろう。

思えば色々な荷物を残してきている。仕方ないから戻るとしよう。

|| || ||

一人、七星はバスの窓際に座って外を眺めていた。

彼女の友人である毒島冴子はもうバスにはいない。

最後まで渋っていたが、七星自身がバスに残るといったので仕方なく去っていったのだ。

彼女はこのバスに残るといつて聞かなかった。

いくらここが危ないのだといって聞かせても、きっと秋一が戻ってくると言って動くことを良しとしなかったのだ。

だから、冴子たちが去った後に紫藤が話しかけても全くの無反応だった。

いつもと全く違う七星に拍子抜けしながらも紫藤は後ろの生徒達を洗脳していった。

紫藤が生徒たちを洗脳する手段は簡単だ。

先生という立場を利用し、演説によって生徒達を自分に依存させる。そして恐怖から逃れさせるためといって淫欲の虜として状況判断力を下げさせる。

その上で自分の言葉には確実に従うように話術で誘導していくのだ。そのためだろう。

あたりが暗くなり始める頃には、バスの中は熱気に包まれ、嬌声が聞こえるようになっていた。

そして欲望に染まった男の牙は窓際にいた七星にも伸びてくる。

七星は謙遜して絶対に自分を褒めようとは思わないだろうが、彼女は十分に魅力のある少女だ。

背はそこまで高くないが、その代わりに十分すぎるほどの發育を遂

げた胸はかなりのものだ。

今でこそ無表情となってしまうているが、笑顔の彼女とはまた違った魅力もあるといえるだろう。

毒島冴子は鋭利な刃物を彷彿とさせる美しい容姿をしているが、高槻七星は彼女と対照的に優しく可愛らしい容姿であると言えるだろう。

ゆえに、淫欲に思考を染め上げた男が引き寄せられないはずもなかった。

一人の男が近寄って彼女の腕を掴み上げ、引き寄せようとした。しかし彼女は動かない。

決して重いわけでもない彼女だが、なぜか動かなかった。表情も全く動かそうとしない。

そして男が思い切り力を込めて引っ張ったとき、ようやく彼女は覚醒した。

「いやっ！ 触らないでよっ！」

「ちっ……このっ……！」

掴まれた腕を振り払い、七星は叫んだ。

それでも男は恐慌する彼女へと手を伸ばした。

「いやぁ……」

彼女がその目から涙を零し、小さく口を開いたとき、唐突に窓が開いた。

そして暗闇の中から伸びた手が男の顔を殴り飛ばした。

そのままそこから窓から覗いた腕の主の姿を見て、七星は小さく呟いた。

「みっちゃん……！」

「また面倒くさいことになってんな。あいつらはどこ行ったんだよ全く」

自分を見上げる七星を見下ろした御劔秋一は露骨にため息をついた。

〓 〓 〓

バスへ戻ってみれば七星が襲われていた。
全く持って世話の焼ける奴である。

正直言って目の前で知り合いの女が犯られるのを見るのは気分が悪い。

「みっちゃん、みっちゃん、みっちゃん……」

「うっせ。ひつつくな暑苦しい」

そんなわけで助けてやればがっちりとハグしてきた。
涙を流してずっと俺のことを口にしている。

気絶してる男や後ろのほうで性行為に励む連中はほっというて、俺は七星に話しかけた。

「おい七星、冴子たちはどこに行った？」

「えっと、皆ここにいるのは嫌だからって……」

「外に出て行っただか。妥当な判断だろ。俺としてはお前がこんなところにいることのほうが驚きだけだな」

「だって、ここにいたらみっちゃんが戻ってくると思って……」

「お前アホか？ そんなんだからさっきもやられちまいそうだったじゃねえか」

「あう……」

俯く七星を視線からはずし、俺は運転席の方に目を向ける。いつのまにか紫藤がこちらを向いていた。

「おやおや、今までどこに行っていたんですか御剣君？」

「ちょっと、どうしても俺がやらなきゃならないことをやってきただけです」

「それはそれは……それでどうなりました？」

「当然、きつちり殺しましたよ」

胡散臭い笑みを浮かべる紫藤にそう答え、俺は窓の外へと目をやった。

<奴ら>はいるが、そう数は多くない。

それよりも問題なのは暗さだろうが……一応、懐中電灯を持ち出してきた。

<奴ら>が音にしか反応しないのだ。

懐中電灯程度の明かりでも俺は十分あたりを見回せるので、そこま
で問題にはならないだろう。

「七星、俺はこんなところにいたくないから行くぞ。お前はど
う？」

「……だつて、邪魔なんですよ？」

「別にお前程度が邪魔しようが俺は気にしない。だから、お前の好
きにすればいい」

俺はそう言つて窓から身を乗り出した。

バス周辺にはく奴ら>の姿は少ない。俺は辺りを見回してすぐにバ
スの外へと降り立った。

そして目星をつけていたとりあえずの宿に向かおうとしたところで、
すぐ後ろで何かが落ちる音がした。

振り返れば、そこにいたのは尻餅をついて鞆を抱えた七星。

どうやらというか、やっぱりこいつは俺の後をついてきたいらしい。

「いたたたた……うう、お尻が……」

まあ何とか立ち上がつてお尻をさすつてるバカは置いて、そろ
そろ急ぐとしよう。

橋の辺りもかなり騒がしいが、銃声まで聞こえてきている。

人がこちらのほうに流れてこないとも考えられない。

家を手して休息をとるのなら、極力他人と接触を取るの避け
るべきだろう。

俺の父のような人間が他にいないとも考えられないのだ。

先ほどのように七星が襲われる可能性は大いにある。だとすれば俺

にも迷惑がかかるしな。

「待って〜待ってよ〜!」

「さっさと歩け、そして口を開くな」

……急ごう。

俺が目をつけた家は、俺の家よりは小さいが俺と七星二人にとっては十分な広さの家だった。

おそらくは、誰か女性の一人暮らしの家なのだろうが中には誰もいない。

家の中が全く散らかっていないところを見ると、外に出ていた時に<奴ら>が出現した時間が重なって帰れなくなったのだろう。

ともかく、残ったものは有効活用させてもらうことにする。

七星がシャワーを浴びている間に、家財道具を使って一階の入り口や勝手口を封鎖する。

生存者であろうと<奴ら>であろうと、侵入させることは危険ではない。

それらを終えた俺は酒を飲んでた。

幸運なことに、冷蔵庫には大量の缶ビールが詰まっていたのだ。

あまりに大量のことを考えて頭が重いので、一度頭を空にするのにちょうどよかったのだ。

缶ビールに口をつけながら、俺はソファに座ってテレビを点けた。どうやら聞こえてきた銃声は、警察が撃ったものようだ。

後は既に判明していることや混乱を招くようなことしかテレビから

情報は得られない。

俺はこれ以上は無駄だと判断してテレビを消した。

俺は残ったビールを飲み干して天井を見上げた。

これからどうなるのか。

父親を殺してついに人殺しとなった俺が、この壊れた世界でどう生きるのか。

困ったことに、俺は全く想像ができなかった。

「みつちゃん？」

不意に、横から七星の声が聞こえてそちらを向いた。

髪は濡れていて、この家にあったバスローブを身に着けている。どことなく胸がきつそうに見えた。

「なんだ？」

「えっと、ね？ 気になったことがあって……」

「だからなんだ？」

「あの時、いったい何をしに行っちゃったの？」

「それはお前に教えなきゃならないようなことか？」

「あ、うん、そうだよ。教える必要なんかないもんね」

そう言ってあははと笑う七星。

その笑顔にどことなく寂しいというか、とにかく何かを感じた俺は、話すつもりがなかったことを話していた。

「親父を殺しにいったのさ」

「……え？」

「わかるだろ？ 前から俺が言ってたクソ野郎だよ。この機会しかなかったんだ。俺があいつを殺すのはな」

「……………」

七星は驚愕を浮かべた表情のまま沈黙。

当然だろう。無垢で純粹すぎる奴だ。理解できないのは当たり前だ。

だが、俺にとってあいつを殺すことが重要だというのも確かなのだ。あいつは子供である俺を駒としてしか見ていなかった。母が死んだときの葬式にさえ出なかった。

俺を育てたのは俺のためではなく奴自身のためだった。

だから、俺はあいつを殺したくて殺したくて仕方がなかった。

なんともいえない表情を浮かべた七星を前に、俺は立ち上がって言った。

「俺はもう寝る。お前も早く寝ろ。明日からもこの地獄は続くんだからな」

「みっちゃん——」

「おやすみだ」

七星が何かを言うのを遮って俺は二階へと向かい、寝室にあったベ

ツドに寝転がった。

そのまま窓の方を向いて目をつぶった。

この一日だけで、俺はかなり疲労したはずだ。

だが、未だに気を張ってしまっているせいだろう。眠気はなかなかやってこなかった。

しばらくして、部屋に誰かが入ってくるのを感じた。

誰かといっても、七星しか該当する奴はいないのだが。

「みつちゃん、起きてる？」

「……ああ」

「あのね、言いたいことがあるの」

「なんだ？」

俺が疑問の声を返すと、七星はそれに答えることなくベッドへともぐりこんできた。

俺は入り口のほうに背を向けていたから、背中越しに会話をすることになる。

「私はみつちゃんが好き。愛してる」

「は？ お前はいつたい何を——」

「みつちゃんがどんな人でも何をしてても変わらないの。私はみつちゃんが好きだから」

「さっきも言ったが、俺は人殺しだぞ？」

「そんなの関係ない」

だが七星は全く怯まずに、むしろ先ほどよりも強く抱きしめてきた。そして語気を強くして俺に告げる。

「だって、私がみつちゃんを好きなのは、みつちゃんがみつちゃんだからだもん」

「……………」

「私にとって大切なのは『みつちゃんが好き』って気持ちだから。どうしてとか、なんでとかって気持ちはいらないの」

「……………勝手にしろ」

だから馬鹿は嫌いなんだよ……………見てなきゃ心配で仕方ないからな。にしても、一世一代の告白のつもりなんだろうが、すぐに寝息を立て始めるのはどうかと思うけどな。

……………まあ、それも七星らしいといえbraしいかもな。

第五話 黒き復讐 白き恋（後書き）

あとがき

主人公は基本クーデレでツンデレです。

途中に挟む三人称は試験的なものですが、好評であれば導入します。

第六話 天国か地獄（前書き）

少し短いが、アニメ版にあわせて終わるし仕方ない。

第六話 天国か地獄

ようやくと朝が来た。

さて、これからどう行動するかを考えることにする。

武器はこのまま鉄棒を使用することにする。取り回しがききやすいように、持つ部分には布を巻いてテープで固定しておこう。

すっぱ抜けて武器をなくすという、アホな事態にはなりたくないからな。

念のため、何故か知らないが物置に入っていたサバイバルナイフを数本頂いていこう。

七星については特に期待はしていない。

あいつは邪魔にならなければいいだけだ。荷物もちにはなるからな。ただ、自衛の為にフライパンでも持っていてもらおう。

あれなら面積が広いから、力さえあれば振り回せるだろう。

運動神経はからっきしだが、あいつはそこそこ筋力があるからな。確か、家の手伝いとか言ってたが……まあいいか。

「さあ出発するぞ」

「みつちゃん、あの……」

「なんだ」

「これ、似合うかな？」

空気を読まずにそんなことを聞いてくる七星。

こいつの現在の格好は制服姿をやめて、この家にあった丈のやたらに短いジーンズとシャツを着ている。

今の時期的にこんな服装でも寒くはないし、動きやすい格好だと言うことで納得ではある。

ただ、汚れやすそうであると言う点では保障できないが。

俺は学生服を抜いて、適当に黒いシャツ姿だ。

ズボンについては見つからなかったので制服のもので妥協するしかなかった。

懐にナイフが数本入れられるように、男物と女物の中間のようなジャンパーを着てはいる。

まあ、まともなモノがあつて助かったよ。

とにかく、七星がさっきからこっちをじっと見ているので感想でも言つてやろう。

適当に言えば満足するだろう。

「ああ、似合つてる似合つてる。ところで荷物は持ったか？ 忘れたら怒るからな」

「持つてるよう！ じゃなくて本当に似合つてる？ なんかスースーするんだけど……」

「知ったこっちゃない。スカートよりはマシだ」

「うう……」

振り返らずに玄関から外に出た。

さつき窓から確認したとおり、＜奴ら＞は周りに存在しない。

この家から離れ、どこか他の場所に移動するには絶好の機会だろう。そろりそろりと足音を立てずに門の影から顔を出すべく前進する。

……視界良好！

「よし、＜奴ら＞はいない。行くぞ七星」

「わ、わかった」

こうして俺たちはまた、死の溢れる世界へと足を踏み入れた。

＝
＝
＝

町を歩いてまず感じたことは、＜奴ら＞の数が少なくなっていること。

おそらくだが、より大きな音をしている方向へと向かっていったのだろう。

静まり返った夜の中、橋の方では散々に騒ぎ立てていた連中もいたのだ。そちらに行っただに違いない。

かといって注意を怠るなどと言うことはしないが。

「人も＜奴ら＞も全然いないね」

「そうだな」

小声でとぼけながら言う七星に返事を返す。

荷物を背負って俺についてくるだけのこいつだが、今のところは足手まといではない。

ただ、こんな状況でもいつもの日常——いや、世界が変わる前と同じようにいられるあたり、コイツも壊れているのかもしれない。

「少なくとも、ただ歩いているだけじゃあ状況は好転しない。さっさと移動するぞ」

「はい。高城さんの家に行くんだよね！」

「……お前の提案だな。判断としては間違っていない」

正直あんまり取りたくはない選択肢ではあるが、確かにそれが一番いいだろう。

この町でも有名なあの大きな家ならば人も物資も揃っているし、防備面でも問題は無い。

ただ問題は、あの家にいることに俺が耐えられるかということだ。既に『まとも』じゃなくなってる俺だ。

未だに自分をまともだと思おうと、まともであろうと思ひ込む連中と一緒にいられるのか。

……ともかく行くしかないか。

「距離は結構離れてるが……まっすぐに向かえば今日中か、遅くても明日には着くだろう」

「そんなに離れてたっけ？」

「……注意しながらゆっくり進むから時間がかかるだろうが」

「あ、そっか」

相変わらず間が抜けた奴だな……いつもどおりだが。

少しは自分でも気をつけるということを学んでほしいものだ。

抜き足差し足をやっているのはいいが、気配を隠す気が無ければ意味がないだろうに。

全くコイツは――

「るる……」

「シッ！」

危ない。

建物の門から出てきたく奴ら>を見逃すところだった。

「み、みつちゃん……大丈夫？」

「こんなんですんでたまるか。さっさと行くぞ。お前も気をつけろ」

「わかってるよう！」

不満そうに頬を膨らませて言う七星に背を向け、俺は歩き始めた。
目指すは高城家。

まずは橋を渡って、川向こうに行かなければ。

道のりはまだまだ長い。

「ねーねー。車は使わないの？」

「……あんなもん乗ってもな。エンジンで敵をおびき寄せただけだ」

「？」

「まだまだそこらへんにく奴らゝじゃないのがいれば、俺たちを楽な相手だと思つて襲つてくるかもしれない。そうでなくとも、わざとらしく仲間になる振りをして近づいてくることだってありえる」

「考えすぎじゃないかな……」

「人間こんな世界に放り込まれて極限状態になれば、なんだつてするだろうさ」

俺もその一つの例だろうし、そんなことを言う権利なぞないだろうが。

それでもまあ、無垢なままのコイツに忠告するくらいはいいだろう。

「さあ行くぞ。そこまで離れた距離じゃないんだ。急げばすぐにつくだろうさ」

「……うん！」

さあ、ゴタゴタ考えるのはここまでだ。
足を進めよう。

〓 〓 〓

町を隔てる御別川の前、橋がギリギリ見えるところまでやってきた。

荷物の中から双眼鏡を取り出して七星に橋の方を觀察させ、俺は周りの警戒に当たる。

「どうなってる？」

「人がいっぱいいるよ」

「秩序は？」

「え〜っと……なんか皆騒いでるし、煙も上がってるよ？」

「ハア——わかつちやいたが警察ももうダメだな。もういいぞ」

「う、うん」

双眼鏡を荷物の中へと戻す七星。

そんな七星を見ながら思考をめぐらせる。

まずは川をどうやって渡るべきか、その一点だ。

橋に行けば暴動に巻き込まれる可能性は高いが、ここですつとウロウロとしているわけにも行かない。

結局……何も方法が見つからない以上はそちらに行くしかない、か。

歩いて、歩いて、御別橋まで辿り着いた。

秩序の崩壊したそこはまさに地獄だ。

疑心暗鬼に陥ったものが近くのものに攻撃し、自分だけよければ良いという連中は他者を犠牲にし、それを制御することもできない警察と、ただただ取材を続けるマスコミ共。

しかし、ここを越えなければ結局は俺たちもこの地獄に飲み込まれて終わりだろう。

恐れずに突き進もう。近づくものは排除するだけだ。

もう俺は人として大切なものも失っている。今更、地獄の住人と同じことをしても変わるまいさ。

『繰り返します！ 警察の指示に――』

未だに指示は続いている警察が、俺と七星にも警告を呼びかける。既に戦争状態の橋の上で、そんな指示を聞くことに何の意味があるのか。

なんだかんだで俺へと必死でついてくる七星と共に、橋の上を駆け抜ける。

時折攻撃を仕掛けてくるバカな大人を殴り飛ばし、こっちに向けて銃撃する大人には車の陰に急いで隠れ。

とにかく急いで足を動かす。

既に秩序も無きに等しい状況だ。

他の馬鹿みたいに暴れる連中を抑えるのに必死な警察を無視し、俺たちはなんとか橋を渡りきった。

昨日同じことをやっていれば、たぶんここまで簡単にはいかないだろうな。

今だってかなり危険だが、昨日は警察が道をしっかりとふさいでいた分難易度も高かっただろう。

「そもそも、ここを封鎖しても意味無いと思うんだけどな」

「え？ 何、みっちゃん」

「なんでもないさ」

渡り終わってしばらく経って、街中を探索してみればまだまだかなりの数のく奴らゝがいるのだ。

これでは封鎖したところでたいした意味は無いだろうに。

橋を離れてしばらくはく奴らゝの姿も見なかったが、なぜか高城の家に近づくに連れてく奴らゝの数は増えていく。

車も飛行機も随分と少なくなって、やけに静かなだけにそれが余計に深刻に感じる。

「チイツ……面倒な」

「みっちゃん……いつぱいきた！」

「んな事はわかってんだよアホ七星！」

大量のく奴らゝから避難するべく、俺は壁を乗り越えて七星をさっさと引つ張り上げる。

バカだから壁の上まで逃げれば大丈夫なのが助かったな。

とりあえずもう少しすれば高城の家だからな。

なんとかして乗り切ればどうにでもなる。

いくら音が出にくい武器を使ってく奴らゝの頭を潰したからと言っても、危険なことには変わらない。

それでも、駆逐しないことには俺の後ろのバカが安全に進めないわけ——やれやれだぜ。

とにかく急いで少しは休めるところに向かおう。
でなければ、俺でなくこのバカが持たない。
元々、体力があるわけではないのだから。

「も、もう大丈夫？」

「ああ、周りにはく奴らゝはいない。それに、あのワイヤーは……」

俺の視線の先には道路を封鎖するようにワイヤーが張られている。
つまり、あの先へと侵入しようとするく奴らゝを防ぐためのもの。
ただ歩くことしかできないく奴らゝなら、たしかにこのワイヤーの
先へは行けないだろう。

「これで到着だ。よく頑張ったな」

「やったゝ。……あう」

「何故このタイミングで転ぶ」

まあ別に良い。

とにかくこれでしばらくはなんとかなる。

これでこの町から出て安全地帯まで逃げ切れれば万々歳だ。

……そう、万々歳。

既に冴子たちはここにいいのかもれない。高城の娘がいるなら親
を頼るのは自然だろうし。

バスを途中で降りた小室はどうなったのか。既に一日が経った俺に
は知るよしもない。

ただ、どうにも嫌な予感がするのは気のせいだろうか。
そしてあの教師、紫藤はいつたどこに行ったのか。
淫らに狂った大勢の生徒たちを乗せたバスに乗って、今どこにいるのか。

……気にするだけ無駄か。

とにかく今は、コイツを休ませてやることにしよう。

俺と違ってまだ普通の範疇にいるコイツだ。

精神的にも体力的にも、既に限界だろう。

さあ、大人しく入れてくれるかどうか分からないがおそらく大丈夫だろう。

怪我もしてないし、まだ未成年と言う立場を利用できるし。

「さあ、あと少しだから気張れよ七星」

「が、がんばる……」

さあ、急いで歩き出そう。

第六話 天国か地獄（後書き）

あとがき

次回で一氣に最終回（仮）。

どんでん返しでどう決めるか・・・

最終話 狂い咲く一輪の華（前書き）

この上なくダークですがどうぞ。

主人公に好感もてない人が多くても仕方ないのかね。

最終話 狂い咲く一輪の華

「あゝ。やっと休憩できたよ。ふにゃ」

「なんともだらしの無い顔だ。全く」

多くの人々や物資が集まる高城家に、なんとか辿り着いた俺たち。やっと休息が取れたことに、七星はだらけまくっていた。冴子たちのグループが、既にここに到着していたことも理由の一つだろう。

まあ、かく言う俺も七星と同じ部屋で本を読んでいるわけだが。窓の外を見てもく奴らゝの姿が無いほどに整備されているなら仕方ない、か。

「ねえ」

「なんだ？」

「そういえばここには来た事があったの？」

「……昔な。ま、気にするほどの事じゃないさ。あっちも覚えてないだろうし」

仕事の関係上、俺に後を継がせる気だったアイツは色んな所に俺を連れて行ったからな。

子供の頃の俺には耐え難い苦痛だったさ。遊ぶことも出来なかったんだから。

……今となつては、そんな呑気なことを言ってる場合でもないけどな。

外は未だに殺伐とした雰囲気だ。

ここに避難してきた大人たちは問題解決の目処も立たずに口論をしている。

元から生き延びる意思を持つ人間は、ここから脱出する準備を進めている。

——今が選択の時だ。

俺たちがいくら自分一人で生き残る力があるとしても、大人は俺たちを子ども扱いするだろう。

おそらくは冴子たちもそれに気付いているはずだ。後は、どういった選択をするかだが……

「七星！ 秋一君！」

「おっと、噂をすればか」

「あゝ！ 冴子だゝ！ 無事でよかったよゝ！」

「な、七星。そ、そう抱きつくな」

「だつてゝ！」

部屋を開けて、何故か着物姿の冴子が部屋へと飛び込んできた。そこへ七星が引っ付いてぐりぐりと頭を擦り付けている。

犬かお前は。

まあ、普段通りのナニカを持っているコイツの存在は貴重か。

「……二人が合流してくれていて良かった。やっぱり秋一君も七星が心配だったんだろう?」

「そんなんじゃないさ。お前と合流しようと思ってバスに戻ったら、マトモなのはこいつしか残ってたかったんだ」

「マトモ……? それはどういう意味だ?」

俺が何気なく口にしたことを、七星を体から離して椅子に座った冴子が疑問に感じて聞いてきた。

どういう意味も何も、そのままの意味なんだがな。

「俺が行った時にはバス内はひどい有様でな。七星も強姦されるギリギリだったのさ」

「なっ……!?!? 彼女は大丈夫だったのか!?!」

「だからここにいるんだろうが。なあ?」

「うん! みつちゃんが私を助けてくれたんだよ冴子。羨ましいでしょ?」

「……ああ」

俺が余りに呆気なく言ったものだから、驚きショックを受けた冴子

だが。

結局、自分が悲惨なことになるとしていたにもかかわらず能天気な笑顔を浮かべる七星には敵わないか。

だからだろうか。冴子は笑顔を浮かべて口を開いた。

「君たちが無事で本当によかったよ」

「お互い様だ。お前が無事で俺も嬉しいさ」

「おー。みつちゃん笑うなんて珍しい」

「む？ 俺は笑ってたか？」

「ああ。笑っていたとも」

……まあ、俺が笑っていたかどうかはともかく。

「なにか、色々と話したいことがあるんじゃないのか？」

「……聞いても、言うてはくれないだろう？」

「——まあな。言うても仕方ないさ」

「なら聞かないよ。言うてくれるのを待つさ」

冴子がそう言つて、一時の静寂が訪れた。

七星は黙つて俺と冴子の顔をキョロキョロと眺めているし、俺と冴子は黙つて会話を中断したままだ。

そんな沈黙に耐えられなくなったのだろう。

七星が冴子に問いかけた。

「ねえ冴子、他の人たちは？」

「ああ、みんな元気だよ。良かったら秋一君たちも来てくれないか？ 話したいこともある」

「……そりゃそうだろうな。子供なんて俺らだけだ。話すこともあるだろうさ」

この状況だ。子供である以上は大人の言うことに従わざるを得ない。常に不安に駆られている大人は、子供のいうことなんて聞きもしないだろうからな。

冴子たちも、そういった選択に迫られていると言っわけだ。

「君は頼りになる。私は信頼もしている。だから手を貸してほしい……いけないだろうか？」

「俺なんか信頼してもいい事なんかねーつつのに」

「そんなことはないよ。君は私の大切な友人だ」

そうかい。そうかいそうかい。

なんにしても話し合う必要はありそうだ。

俺が生き残るためにも、こいつらが生き残るためにも、話し合うことは必要だ。

とりあえずそういうことにしておこう。

「わかった。案内してくれ。七星も来い」

「あ、はい！」

「ありがとう二人とも。さあ、私についてきてくれ」

俺たちは冴子の後ろについていくことにした。

あいつらも地獄の夜を乗り越えたのだ。

狂わないにしても何かしら変化が訪れる。今は目に見えずとも、必ずそれは目に見える形で。

冴子は何も言わないと言うことは問題ないから置いておくが。

そういった意味で位置危ないのは……俺、か。

|| || ||

「この大人たちに飲み込まれれば確かに安全かもしれない。しかしそれは確かかどうか。考えることを剥奪され、大人の言うことに従わされて最善の行動を取ることもできぬまま死ぬことにもなる」

「あんた、なかなか言うわね」

「心が捻じ曲がってるだけさ。褒められるようなことでもない」

付き合い合われて意見を言えば、そんな言葉が帰ってきた。

冗談じゃない。俺は褒められて素直に喜ぶ人間でもないし、褒められたいとも思っていない。

俺が来る前にそれなりもトラブルもあったようだが……まあ、解決したならそれでいいさ。

「それでどうするんだ？　このまま大人と合流するのか、それとも別れて生き残るべく行動をするのか」

「それは――」

この集団のトップらしい小室へと俺は問いかけた。

小室は何か言いかけたが、それは外から聞こえてきた大量の車の音にかき消された。

ここまでく奴らゝが来ないとはいえ、一体何事だ？

「あれは……？」

「この県の国粹右翼の首領！　正邪の割合を自分だけで決めてきた男！　アタシのパパ！」

「――やっと責任者のお出ましか。なんかやらかしてくれそうだ」

「？　みつちゃん、どうかしたの？」

「いーや、気にすることじゃないさ。お前はな」

あの親父さんが噂に違わぬ人物なら、たぶん民衆を黙らせようと何かするだろう。

未だに現実を見ようとしなない馬鹿の目が覚めるか、それを見ても覚めないかは知らないが、とにかく期待させてもらおう。

皆でベランダに出て高城の父、高城壮一郎の演説を聞く。

ざわめく大人の群集たちの目の前に刀を持って立ち、＜奴ら＞が入った檻の前に立つ。

檻の中にいる＜奴ら＞の着ている服からして、元は仲間か何かだったのだろう。

その首を刀で切り飛ばして彼は言った。

「素晴らしい友、愛する家族、恋人だった『もの』でも、躊躇わずに倒さなければならぬ！ 生き残りたくば……戦え！」

素晴らしい。素晴らしい意見だ。

まあ親父が＜奴ら＞になる前に、まだ親父として人間である間に、自分自身の手で殺したかった俺とは別物だが。

それでも確かに、高城壮一郎が言った今の台詞は素晴らしい。

元がどんなに大切な奴だったとはいえ、＜奴ら＞になったら変わらない。

正論なのだ。これ以上ないほどに。

「刀じゃ効率が悪すぎる……」

そんな中で平野がそう呟いた。

何故だか知らんが持つてる銃器と関係があるんだろう。

あんなもん、弾が切れればただの棒切れだろうに。特に、補充の目処もついてない今ではな。

「決め付けが過ぎるよ平野君」

「でも日本刀の刃は骨に当てたら欠けますし、3・4人も斬ったら役立たずに……」

「たとえ剣の道であっても、結果とは乗数なのだ。剣士の技量！

刀の出来！そして、精神の強固さ！この3つが高いレベルであれば、何人斬ろうが刀は戦闘力を失わない！」

剣について冴子よりも詳しいと言うのなら別だが、ここにはコイツがいる。

俺も詳しいことは知らないが、剣というのは精神が大きく関わるらしい。

毒島冴子という人間の精神の強固さなら、おそらくは何十人斬ったところで刀が折れることは無いだろう。

「で、でも血脂がついたら——」

「料理と同じだよ。良い包丁を腕のいい職人が用いた時、刃に無駄な脂は残らない。日本刀と人体でもその理屈は変わらん」

「でも、でも——」

「それ以上は見苦しいだけだったのに」

「お、おい平野。もういいじゃな……」

「さわるな！邪魔するなよまともに銃も撃てないクセに！」

いい加減に腹に据えかねたか、これ以上自分の縋る物が失われるのを避けたいのか、平野は銃を抱えて部屋を飛び出した。

手を伸ばしかけて暴言を言われた小室もわけのわからない顔をしている。

鈍いのか。俺ですら少しはわかるというのに。

一人また一人とベランダを後にする。

俺と七星もこの場を後にすることにした。既に、選択についての話

など成立しないだろう。

俺もまだ決め切れていない。

さて、どうしたものかな。

生きるために、自分以外の全ては利用するものとして見るのか。

それとも、共に生き残るための信頼できる仲間としてみるのか。

どちらにしても結局は、俺が最後に優先させるのは自分なのだろう。

<奴ら>ではない人間を、それも『親』を、明確な意思を持って殺している俺は。

人でなしの悪という奴なのだろうな。

「あ、みつちゃん、あの人……」

「ん？ どうした？」

庭に出てきて散策するうちに、はずれのほうまで来てしまった。

そんな所で七星が何かに気づいたかのように声を上げた。

俺もつい釣られて七星の指差した方向を見てしまう。

「……あれは？」

そこにいたのは一人の男子生徒だった。

特に見覚えは無いが、ここまでたった一人で逃げ延びてきたのか？

とてもそんなことが出来るとは思えないが、あの制服を着ているということはそうなのか？

しかし、それだけではこんなところにいる理由にはならない。

携帯電話でどこかに電話を隠れているというのも怪しすぎる。

「まさかとは思うが……おいそこの！」

「えっ！？ あっ！」

声をかけるなり近寄って、携帯を奪い取って耳に当てる。

あいにく会話は既に終了していたようですぐに切れてしまったが、俺は確かに耳にしたぞ。

電話向こうから聞こえる嬌声をな。

「紫藤か。つーことはこいつは駒だな。上手いことしゃがるぜ」

「この、携帯を返せこのっ！」

「んなもん返してやるよ。おらぁっ！」

「ぶっげっ！」

思い切り顔面に携帯を叩きつけて返してやった。

大方、紫藤に唆されてバス内の連中の偵察に使われたって事なんだろう。

……全く。紫藤が何考えてるのか知らんが、ここに来やがる気満々じゃねえか。

選択の余地もなしに合流して流されて安全確保したいってか。

ま、来るなら来るがいいさ。

合流してもあの高城の父がいるんじゃ、紫藤も自由に洗脳は出来ないだろうさ。

「」

「――で、今度は何だった？」

「ああ、秋一君。今、小室君たちがあちらの大人たちを説得しよう
と――」

「そうか。そりゃ大変そうだな」

「冴子はどーするの？」

「ん……私は会長に呼ばれていて……」

皆で集まっているところに合流した俺たちは、真っ先に冴子へと話しかけた。

すぐ近くに高城の父がいるから、なるべく早く離れたい。
言ってることは大好きかもしれないが、ああいう人間は苦手だからな。

なにやら見られてる気もするが、とりあえず部屋に戻っておくか。
こんなところで目をつけられるなんて冗談じゃないさ。

部屋に戻る途中で、知らないおっさんに話しかけられた。

「君は確か、御劔元国会議員の……」

親父の知り合いらしい。ということはここまで逃げてきたのか。
厄介な奴に見つかったな。こいつもまた俺の後ろにいる七星に時たまチラリと目を向けている。
この好色オヤジが。＜奴ら＞にでも食われちまえばいいものを。

――胸の内ではそんなことを考えながら、俺は冷静に受け答えることにした。

「父の知り合いですか？」

「そう、そうなんだよ。君のお父さんはどこかな？ 連絡がつかなくてね」

「はあ……」

連絡がつかなくて当然だ。

探している人間は既に死んでいるのだから。

「もう死んでるんじゃないですかね？ こんな状況だし」

「そんな……確かに連絡はあったのに。それに君は父親の事をどうしてそんな風に……」

「もう死んだかもしれない奴の事を心配するわけ無いじゃないですか。今、生きている奴の事しか興味有りませんよ。それでは……」
七星の手を握って、おっさんの横を通り過ぎる。
啞然とした顔でこちらを見るおっさんを見無視して、只管に歩を進める。

「まったく。腹の立つことを思い出させやがって。」

「みつちゃん？ 顔が怖いよ？」

「——お前は……いや、まあいい」

こうだからこそコイツはコイツなのだ。

それは変えようが無いコイツの長所であり短所だ。

考えるだけ無駄か。というか頭痛がする。

部屋に帰って休息でも取ろう。

不意に目を覚ます。

扉をノックする音がする。同じベッドで寝ていた七星を押し退けてドアへと向かう。

俺が扉を開いたそこにいたのは案の定冴子だった。

「おや、秋一君は寝ていたのか？」

「気にしないでいい。やることもないから休憩してただけだ」

「ああ……でも後ろの七星の格好は……」

「気にするな」

あいつ、寝てる間に熱くなると服を脱ぐ癖でもあるんだろう。
正直言っただけには関係ない話だ。

「ふふ。君はいつもどおりだな」

「そう思つか？」

「？」

「いや。そうだな。俺はいつもどおりさ。お前はどうか？」

「私は……どうなんだろうね」

冴子を部屋の中へと招き入れ、共にベッドの上に座る。

俺が問いかけた言葉に、薄い笑みを浮かべて七星の頭をなでながら冴子が答える。

「大丈夫だよ。私はまだ私を保っている。君の言葉のおかげでもある」

「そうかい。そりゃよかった」

「……だから秋一君、何か私にできることはないかな？ 君の助けになりたいんだ」

一歩分だけ近づいて、俺に話しかける冴子。

——助けか。それを必要としているのは、俺よりもお前のほうだろうというのに。

ずっと昔に言った少しの言葉を覚えていて、今になって……いや、
今だからこそ借りを返そうというのだろう。

義理堅いと言うか、自分に厳しいと言うか。

「気にしなくていいさ。お前の友達だからってことで、俺と七星はこの部屋をゲットしたわけだしな」

「そんな……それよりも今は君自身の方が――」

「俺がどうしたって？ いつもと変わらないんだろ？」

「……すまん。嘘をついた。君は前と変わっている。多分だと思うが――人を、殺めてしまったのではないか？」

ピクリと、俺の手が反応した。

やはりこいつには隠し事は無理のようだ。
この洞察力には敵わないな。

「……そうか。それで、お前はどうするんだ？ 俺が誰かを殺していたとして、それでどうする？」

「――何も言わないよ。私には言う資格は無い」

「そうだろうとも。お互い様ってわけだもんな」

「ただ、一つだけ」

「ん？」

一拍おいて顔を近づけてくる冴子を真正面から見据える。
鋭い瞳が、俺の心の中を覗き込むようにこちらを見ていた。

「秋一君は秋一君のままでいてくれ。その……私も、君の言葉を忘れないから」

最後の言葉を言いながら顔を背け、冴子はベッドから立ち上がった。

「なんだ？ 恥ずかしかったか？」

「違う！ ……その、私は小室君たちが親を探しに行くのを手伝うのだ。だからしばらくここから離れることになる」

「そうか……そうだな。お前はそういう奴だからな」

「うむ。私は毒島冴子だ。それ以外の何者でもない。それでは、また後で会おう」

「ああ。また後でな」

冴子が出て行った後で、俺も冴子がしていたように七星の頭をなでる。

のん気に寝言を言いながら、七星が寝返りを打った。

この地獄のような世界で、ようやく辿り着けたオアシスのような場所です。

こいつはどんな夢を見ているのだろうか。

なんとも幸せそうな顔を見る限り、悪夢ではなさそうだ。

素直に羨ましいと、そう思った。

少し暗くなってきた。

部屋にあるライトを付け、読書をする。

七星は先程目を覚まし、自分も冴子に声をかけるといって急いで出て行った。

前触れは何も無かった。

唐突な。余りにも唐突な出来事だ。

バチツという音とともに、ライトの明かりが消えうせた。

おかしいと思って何度かスイッチを切り替えるが、一向につく気配は無い。

それに加え、外から聞こえてくる怒号とざわめき。

部屋から顔を出して周りを伺えば、周りからも携帯が壊れた、車が動かないという声が聞こえてくる。

窓の外からは、時間からは考えられない眩しい光が差し込んでくる。

「こいつはもしかして……もしかするか？」

この前読んだ小説みたいにEMPだとすれば、マジでまずいことになる。

今後俺が生き残るにしても、電気製品が全部イカれちまうのはヤバすぎる。

外でも相当パニックだろうな。

『ぎゃあああああああ！』

「チツ。既に手遅れみたいだな」

遠くから聞こえてきた悲鳴に、思わず舌打ちをする。

門で見張ってた連中は何をやってる。
いや、過ぎたことを考えてももう遅い。

急ぎ門へ向かおう。もしかしたら冴子あたりが俺を呼ぶ可能性もあるが、それよりは俺が勝手に動き出すと思うだろう。

あの七星がまたバカやってる可能性もあるが、まあ大丈夫だろう。
冴子に会いに行ったのなら、そこまで危険じゃないだろうしな。

破られた門から、続々と押し寄せるく奴ら>の波。

EMP攻撃による機械類の麻痺と起こった混乱、それに付けこむ様に大量のく奴ら>がやってくる。

死の波が、近くにいた馬鹿な大人どもを飲み込んでいく。

どこから発生した炎が、テントにまで燃え広がって大火となる。

そんな一瞬にして地獄に化したこの場において、俺は何をしているのか。

冴子たちに合流した時に、アイツを任せられたことが原因なのか。
それともただ単に、地獄と化した世界を見て血に狂ってしまったのか。

悲鳴と怒号が支配する世界を駆けて、く奴ら>の頭に鉄の棍棒を喰らわせる。

俺みたいなこんな狂った人間は、狂ったままく奴ら>を殺して死ぬ。

何故か、今はそれが一番正しく思えてしまっていた。

あんなに生きていたかったのに、それは何故なのか。

やろうと思っていた殺人を済ませたからか？ それとも一度の安心を得たからか？

どちらも違う。

きっと、冴子たちと一緒に笑顔を浮かべるバカの顔が眩しかったんだろう。今までそんなことを感じたことなど無かったのだが。

その時確かに、俺なんか誰にも必要とされていないし、俺自身も俺の存在が必要だと感じられなくなっただ。

だからこそ俺は駆ける。

背中の方で爆音がしても。顔に血液が付着しても。血で服が重くなっても。

でもどうしてだろう。

俺の脚は止まってしまった。

ごくごく小さな、たった一人の女の声で。

「あ。みっちゃんだ……」

「このバカが。ついてくるなと——」

聞こえるはずのない声のする方向へと振り返る。

いつもどおりの呆れた声を投げかけてやろうと思って。

しかし、俺は最後まで言い切ることは無かった。

七星は血に塗れていた。顔色も悪かった。声も掠れていた。その血が何かに食いちぎられたかのような肩から流れ出ていることに、俺はすぐに気付いてしまった。気付かないはずがなかった。

「お前……噛まれて……！？」

「あ……あはは……噛まれちゃった」

空気で乾いた笑顔を浮かべる七星。そんなに涙を流しながらじゃ、笑顔にもなっていないだろうが。

「バカが……なんでここにいるんだ。バカだろうお前。あいつ等と何で逃げないんだ」

「みっちゃんが心配だったんだもん……ごめんね。私ってドジだから」

笑って済む問題じゃないだろう。

お前は死んじまうんだぞ？ 死のうとか思った俺が言うことでもないが、く奴ら>になっちまうんだぞ？

——だってのに、なんでお前は笑ってるんだ？

「あはは……ゲホッゴホッ！」

「血まで吐いて……死ぬ寸前の癖して……なんで笑える！ 笑うな！」

「ゲホッ……あはは。だって、みっちゃんが好きだって言ったでしょ？ だから私は満足なの」

「さっぱりわからない。お前はあいつ等と一緒にいて笑って、それでいいだろうに」

近くに倒れていた男が腰に提げていた日本刀を拾い上げる。

高城の父の部下だった男だろうが、無様に死体を晒していた。

俺はこの日本刀で、やらなければならないことがあった。

鞘から刃を出し、鈍く光る刀身を七星へと向ける。

「許せとは言わないぞ。覚悟はあったみたいだからな」

「……うん。私はく奴ら>になりたくないもん。みっちゃんに殺してもらった方がいい」

今にも倒れそうな顔で、まっすぐに俺の方を見つめている。

少し前に見た冴子の目にも似ているが、死に際のコイツの視線の方が強く感じた。

「お前をく奴ら>にはさせないさ。食わせもしない。俺が殺す。死体は燃やしてやる」

「うん」

「お前は俺が殺す。俺は多分、お前を忘れないだろうさ」

「うん。うんっ……ありがとう」

礼を言われるようなことはしていないというのに。
こんな所までお前を来させて、死に追いやったのは俺の行動だとい
うのに。

なんで恨み言一つ吐かないんだ。吐いてくれないんだ。

「うん、ありがとみっちゃん。……好きだったよ」

「さよなら七星。天国にいけることを願ってるよ」

俺は七星に死を与えた。

七星はく奴ら>になることは無いだろう。

永久に、この世からも忘れ去られていくのだろう。

——嗚呼。どうしてこんなに虚しいんだ。

|| || ||

誰も彼もが死んでいく。

無数に訪れる<奴ら>に噛まれ、食われ、<奴ら>と化していく。

俺はずっと戦い続けていた。

何も考えないで戦い続けないと、おかしくなってしまういそうだった。

<奴ら>を殺すと凄くスッキリする。

とても、凄くスッキリする。

でも、そのたびに心の中までスッキリしてしまう。

スッカラカンになってしまう。

それでも今の俺は、<奴ら>を殺すことしか考えられない。

……俺は狂ってしまったのか。

狂ってしまったのだろう。

自覚があってもやめられない。

<奴ら>の頭を鉄棒で叩き潰し、<奴ら>の首を日本刀で刎ね飛ばす。

一向に満たされない、加速度的に乾いていく心をどうにかしたいと願いながら。

アイツはこんな俺が好きだといった。愛していると。

もう会うことが出来ない七星、俺にとってアイツは何だったのだろうか。

いつも傍にいた。くつついてきた。

始めは邪魔だったが次第に気にならなくなった。

親父の思惑と七星の利用価値を聞いて腸が煮えくり返った。

世界が壊れてしまった時、好きだと言われてもよくわからなかった。もう助けることすらも敵わないうえ、自分で首を切り落とした時は本当に嫌な気分だった。

でも、もしかしたら。

七星を殺した時の光景が残っているというのが、大切な記憶の一つだというのなら。

——俺は七星が好きだったのかもしれない。

……全ては過去だ。過去の出来事だ。

今の俺は、<奴ら>を殺して笑みを浮かべる狂人でいい。
そうだとも。

心が乾いていくと知っていても、そうすることしか出来ない殺人鬼。
もう、それでいいんだ。

この地獄の世界で希望を持って生きていく事など、もう出来はしないのだから。

This is the dead land

ここは死の大地

In this last of meeting places

この終末の集いの場所で

We will meet with death .

我らは死に出会う

There is no hope for us .

我らに希望は無い。

The world ends here .

世界はここで終わる。

最終話 狂い咲く一輪の華（後書き）

あとがき

この小説で一番表したかったものは、『個人』なんだけどね。
かけがえの無い唯一の者は、人が人であるという個人の意思なので
す。

表せた気なんて微塵もありませんがね！

……まあ、このような作品にお付き合いいただきありがとうございます。
ました。

彼がこの後どうなったのかは、皆様の想像にお任せします。

最後のはThe Hollow Menより一部抜粋。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6429m/>

学園黙示録外伝 御劔紀行録

2010年12月25日13時03分発行